ISSN 2185-5501

東 ア ジ ア 研 究

（東アジア学会機関誌）

東アジア学会設立 20 周年記念誌

第12号

2010 年 10 月
東 ア ジ ア 学 会

『東　ア　ジ　ア　研　究』第12号

―東アジア学会設立20周年記念誌―

目　　次

巻頭言

（東アジア学会会長／(株)トクスイコーポレーション代表取締役会長）徳島　千穎（1）

東アジア学会の歩み　（西南学院大学教授）小川　雄平（2）

東アジア学会創立20周年を記念して

（ビジョンと連帯21会長／韓国海洋大学教授）金　泰萬（6）

東아시아學會와 韓日兩國의 地域間交流

（釜山廣域市議會政策研究室長）朴　明欽（8）

東アジア学会と日韓両国における地域間交流（日本語訳）

（釜山広域市議会政策研究室長）朴　明欽（13）

東アジア学会と私― 学問への旅を終えて ―

（中国・吉林大学元博士指導教授）趙　鳳彬（17）

東アジア学会20年

（東アジア学会副会長／RKB毎日放送代表取締役社長）永守　良孝（27）

東アジア学会と私

（東アジア学会顧問／福岡県日朝友好協会会長）北原　守（29）

小川先生との出会いが学会とのかかわりの始まり

（朝日新聞社監査役付）有田　茂（31）

林一信さんを偲んで　（東アジア学会名誉会員）櫻井　浩（32）

東アジア学会20年の活動記録　（34）

巻頭言

会員各位ならびに後援者の皆様の一方ならぬご指導・ご尽力の下、本学会は 1991 年の創設以来記念すべき 20 周年を迎えることができました。創設当時を顧みますと、1990 年は戦後 45 年の分断を経て東西ドイツの統一が実現し、また国内では平成不況突入前夜のバブル経済絶頂期の年でもありました。東西冷戦の終結を契機に、この年アジアにおいても韓国がソ連と国交を樹立、次いで 1992 年には同国と中国の国交正常化も図られました。その間、1978 年末鄧小平中国国家主席の号令で始まった中国の改革・開放路線は一貫して拡大・成長の途上にあることは周知のとおりであります。

本学会の創設は、政治・経済・社会・文化を対象に、自ら東アジア研究に邁進するとともに、近隣諸国研究者との相互研鑽、人的往来を通じて、互いの文化・価値観の相異を乗り越え、未来志向の善隣友好の増進を、草の根ベースで実践することを目的としています。時代を読み、いち早く本学会の創設に動かれた発起人の皆様、別けても初代会長を務められました現九大名誉教授の木下悦二先生、そして創設以来、終始企画・運営の陣頭指揮を執られた西南学院大学商学部教授の小川雄平先生には、深甚な敬意と謝意を表する次第であります。

現下の国際諸情勢は、米国経済の地盤低下と新興国へのパワーシフトを引き金に、益々混迷の度合いを強めています。

私共東アジア学会は、如何なる時代にあっても研究者・企業人・ジャーナリスト・一般市民から成る多様な発想と叡智を結集し、地域経済及び国際関係のための提言・情報発信に努めてまいります。

本学会の 20 周年記念にあたり、これまで皆様から賜りましましたご指導とご懇情に対し、謹んで御礼を申し上げます。

2010 年 10 月

東アジア学会会長／(株)トクスイコーポレーション代表取締役会長　徳島 千穎

東アジア学会の歩み

西南学院大学教授　小川 雄平

東アジア学会は 1991 年８月 30・31 日に第１回記念大会を開催して出発、以降毎年多彩な研究･交流活動を展開し、今年で丁度 20 年を迎えることになった。会員数も 100 名を超えたので、７月には日本学術会議協力学術研究団体の認定を受けるべく登録申請した。現在、その認定を待っているところである。福岡を中心とする地方の学会組織としては規模的にもかなり大きいのではないだろうか。北九州市が前年に設立した（財）国際東アジア研究センターをバックアップする研究組織を作ろうというのが、学会結成の動機であったが、学会設立に携わった者としては、今日の東アジア学会の姿は、成人した子供を見るようで、感無量である。

東アジア学会がこれまで順調に発展してこられたのは、その際立ったユニークさに負っているように思われる。その一つは、通常の学会に見られる、いわゆる「学者先生」だけの組織ではないことである。もちろん研究者の比重は高いが、地元企業家やマスコミ・行政の関係者も少なくないし、東アジアに関心を持つ一般市民の参加もある。学会の「顔」でもある会長職に、地場企業（株）トクスイコーポレーション取締役会長の徳島千穎氏に就任していただいていることや、福岡県や福岡市の外郭団体、地場の報道機関や経済団体の責任者の方々に理事をお願いしていることも、学会のユニークな性格を表していよう。

いま一つのユニークな点は、地域に根ざした学会であるから当然ではあるが、研究対象である東アジアを常に地域の視点から捉え、中国や韓国の地方の研究機関や市民研究組織と交流・連携しながら研究活動を展開してきていることである。わけても、海峡を隔てて指呼の内にある釜山とは、かつて国境に囚われない自由な「域際交流」が盛んだった往時に思いをいたし、学会の設立当初から、市民研究組織と活発な「域際交流」を続けている。釜山の「韓国東アジア学会」や「ビジョンと連帯 21」との合同研究会の開催がそれである。

第１回目の日韓合同研究会が開催されたのは､学会設立半年後の 1992 年２月である。釜山発展システム研究所の朴仁鎬教授や釜山発展研究院の朴明欽研究員・琴性根研究員の骨折りで､釜山で開催された。翌 93 年には釜山でも「東アジア学会」が設立され、94 年以後毎年、日韓東アジア学会の合同研究会が釜山と福岡で交互に開催されるようになった。94 年の最初の日韓東アジア学会合同研究会は当学会の第４回大会も兼ねて、中国南開大学陳鉞教授の協力を得て、天津市との共催で、７月 25・26 の両日、天津市先達大酒店で開催された。これが契機となって、天津市は北九州市が主宰する「東アジア都市会議」に加盟を果たした。

東アジア学会が釜山や天津以外の海外の地方で研究会やシンポジウムを開催したことも少なくない。天津市で開催された第４回大会の終了後、エクスカーションも兼ねて山東省東営市に移動し、勝利油田の見学と現地研究者との研究会が開催されたし、第６回大会は、遼寧亜洲太平洋研究所秦鴻祥所長の協力を得て、96 年８月２日、中国遼寧省瀋陽市で開催された。学会の第６回大会は当初、北朝鮮との国境都市の丹東市での開催を予定していた。韓国東アジア学会のメンバーも参加を予定していたが、丹東で韓国人の参加する国際会議を開くことは中国当局の認可が得られず、丹東の見学を済ませて瀋陽に入った日本側参加者と釜山から大連経由で瀋陽入りした韓国側参加者とが瀋陽市内のホテルで合流し、合同で研究会を開催することになったのである。

翌々年の第８回大会も、日韓東アジア学会合同研究会を兼ねる形で、98 年８月 30 日に韓国慶尚北道安東市で開催された。この時には、儒学者の書院（私塾）の見学や、「沙也可（秀吉の朝鮮出兵に従うも朝鮮側に投降・味方をした武将）」の末裔との会見というエクスカーションもあった。俄かに会員の間で「沙也可」への関心が高まり、2000 年５月には、「沙也可＝原田種臣」説の提唱者である丸山擁成西南学院大学教授を招いて、第 30 回定例研究会が開催されている。

1999 年の日韓東アジア学会合同研究会も韓国の地方都市での開催となった。同年 11 月 21 日、浦項市制 50 周年記念事業として、「韓日海峡交流圏の再検討」をテーマとする国際シンポジウムを韓国慶尚北道浦項市で開催することになったからである。2007 年の第 17 回大会は、10 年ぶりに中国での開催となった。東北財経大学金鳳徳教授の協力を得て、遼寧省大連市の同大学を会場に、９月 15・16 の２日間に亘っての開催となった。

学会は、釜山とは切っても切れない関係を続けてきたが、韓国東アジア学会との合同研究会は、2002 年３月釜山発展研究院で開催された研究会を最後に、釜山での開催は中断されることになる。韓国東アジア学会の会員が激減し、活動不能に陥ったからである。04 年に日本側で合同研究会を開催したが、再建されたという韓国東アジア学会からの参加者は少なく、間もなく韓国東アジア学会は消滅した。また、93 年以来続いていた韓国の民族統一研究院との合同研究会も､98 年 12 月開催の研究会をもって終了していたので、韓国との研究交流は中断するかにみえた。

しかし、03 年、韓国東アジア学会と入れ替わるように、釜山の知識人の研究交流組織である「ビジョンと連帯 21」から、金英哲会員を介して交流の申し入れがあり、同年７月 26 日には韓国海洋大学金泰萬教授をはじめとする釜山側メンバーが来日、西南学院大学を会場に「日韓相互理解の深化」をテーマとする最初の交流・討論会を開催した。翌年は日本側が釜山を訪問し、７月 15 日に合同のシンポジウムが釜山民主公園で開催された。以後、「ビジョンと連帯 21」とは、毎年合同の研究会を、釜山と福岡で交互に開催している。合同研究会では、政治・経済・文化・社会等の分野別の分科

会方式が定着してきており、分野によっては討論の積み重ねの結果、共同研究への発展も期待される状況にある。また、例えば政治分野では、部会独自の活動が始まり、今後の展開に期待が集まっている。

東アジア学会は、2010 年９月までに 19 回の大会と 53 回の定例研究会を開催した。これに、「日韓東アジア学会合同研究会」・「ビジョンと連帯 21 との合同研究会」・「民族統一研究院との合同研究会」の開催を加えると、開催された研究会の数は実に 88 回に上る。毎年少なくとも４回以上の研究会を 20 年間に亘って開催してきた計算になる。これほど活発な研究会活動を行っている学会も少ないのではないだろうか。

活発だったのは研究会活動に止まらない。特筆すべきは、2003 年５月に、歴史教科書の副読本『日韓の架け橋となった人びと』を編集し、明石書店から出版したことであろう。この事業は、釜山の韓国東アジア学会や「ビジョンと連帯 21」との合同研究会で、常に何らかの形で議論されてきた課題である「歴史認識共有化」に向けた一つの試みである。我われが東アジアの人びとと歴史認識を共有し、共生社会を築き上げるには、共通の歴史教科書を編纂し、次代を担う若者に東アジア地域共通の歴史認識を持ってもらうことが重要だとの認識から、学会では、歴史教科書の副読本の編集に取り掛かった。編集委員会では議論を重ねて、権力者でも英雄でもないごく普通の職業人・知識人・市民が、時代の制約を受けながらも日韓の相互理解と交流に努めた、あるいはその礎を築いたという事実を、次代を担う若者に知ってもらおうと、李三平・雨森芳洲・安重根・楊宗悦・尹東柱・田内千鶴子の６人を取り上げてその活動を紹介したのである。幸いにも同書は好評を博し、完売となった。

いま一つ特筆すべきは、2007 年の北九州市市民講座の受託事業である。この事業は、北九州市生涯学習センターが市民に提供する「アジア理解講座」を学会が受託し、講座の企画・運営の一切を引き受けるものである。講座は、日本海・黄海・東中国海を「東アジア地中海」と捉え、「『東アジア地中海』の時代を拓く」をテーマに、物流・観光・政治・文化・ビジネス・環境を専門とする会員を講師に据え、６月 27 日から毎週１回の講義を９回行い、９月５日には講師陣によるパネルディスカッションを開催して締め括った。

このように当学会が多彩な活動を展開し得たのは、学会事務局の地道な支援活動のお陰でもある。東アジア学会が北九州の（財）国際東アジア研究センターのバックアップを企図して設立されたという事情もあって、学会の事務局は、設立当初から（財）国際東アジア研究センター内に置かれた。したがって、会員への連絡・広報から会費の徴収、経理事務、機関誌の編集・発行等の学会の事務作業は全て同センターの事務部門に委ねられてきた。こうした状態は、2005 年４月に学会事務局を西南学院大学に移管するまで 15 年間も続いた。20 年の内の４分の３は同センターに全面的に依存してきたのである。同センターの歴代の担当職員の皆様には、この場を借りてお礼を申し

上げたい。

以上、20 年に及ぶ東アジア学会の活動を概観してきた。この間に、（財）国際東アジア研究センターのバックアップ組織として発足した当学会も、「韓国東アジア学会」や「ビジョンと連帯 21」といった釜山の市民研究団体との学術交流を深める中で、「平和な多民族共生社会」の実現に向けて東アジアを重層的・総合的に研究する地域の市民研究交流拠点へと成長を遂げた。成人した当学会は、今後どの方向に研究を展開すべきであろうか。最後に、この問題に触れて結びに代えたい。

「少子高齢化・人口減少社会」の扉を開いてしまった我われに必要なのは、「東アジアの活力」を取り込むことだといわれている。加えて必須となるのは「地域の自立」であろう。地域は、「東アジアの活力」を取り込む具体的な手だてを自身で考え出さなければ、発展を持続させることが出来ないからである。東アジア学会も、根ざしている地域の視点を持ち続け、対象である東アジアの更なる研究に取り組んで行かねばならない。釜山との学術交流の成果を踏まえて、次の 20 年は中国の、それも中国内の周辺部地域の本格的な研究と学術交流に取り組んではどうであろうか。中国は 55 の少数民族を抱える多民族国家であり、北は東北３省がロシア極東地域・北朝鮮と、南は雲南省・広西省がラオス・ミャンマー・ベトナムといった ASEAN の国々と国境を接している。したがって、中国内周辺部地域の研究は、一方で中国中心部の研究と、他方で東アジア研究とに広がって行くことになる。

そこで、更なる提案は、先ず以て中国内北方の周辺部地域、具体的には東北地域に研究の焦点を当てるのである。東北地域は現在「東北振興」という地域再開発に取り組んでいる。国境地域を抱えていることで、「改革開放」の波に乗り遅れたからである。国境を跨ぐインフラ整備とその利用については、政府が乗り出すことになり、北朝鮮の羅津港と、中国国境の圏河から羅津港までの道路をともに中国が借り上げて整備することも決定した。最近、圏河と北朝鮮の元汀を繋ぐ国境の橋梁が改修され、国境を跨ぐインフラ整備事業は動き始めた。ロシアも北朝鮮国境のハサンから羅津までの鉄道の改修に着手し、羅津港の本格的な利用のための準備を進めている。中国やロシアの動きが北朝鮮を巻き込み、その経済や社会に大きな影響を及ぼすことは必至である。となれば、韓国も座視できなくなり、文字通りの「多国間経済協力」が展開されることになろう。「ビジョンと連帯 21」との連携を更に深めながら、胎動を始めた中国東北地域の研究を推し進めるのはどうであろうか。

東アジア学会創立 20 周年を記念して

ビジョンと連帯 21 会長／韓国海洋大学教授　金 泰萬
（日本語訳：李　演華）

2003 年の夏、初めて釜山の「ビジョンと連帯 21」の会員たちと福岡を訪問し、「東アジア学会」と共同シンポジウムを開催しました。実は、この共同シンポジウムのための訪問が、私にとっては初めての福岡訪問でした。シンポジウムでは、韓日間の相互理解を深めるための「歴史認識共通化の可能性」に関する議論もあり、北朝鮮に関する李南柱先生の発表も意義深いものでした。「ビジョンと連帯 21」と「東アジア学会」は初めての出会いだったのですが、得た成果は大きかったのです。

実は、その時、私たちは初めて在日朝鮮人の歴史と人生に関する断片的な知識を得る機会にも恵まれました。金英哲先生の案内を受けて朝鮮学校を訪問し、徴用者が残酷な条件の下で労役させられていた炭鉱も訪問しました。それを通じ、こんなに近距離に私たちが知らない事や忘れられた韓日間の歴史がそのまま生きているという事実を確認して胸が詰まりました。

それからは「ビジョンと連帯 21」と「東アジア学会」は毎年相互に訪問しあい、両地域の共通関心事について討論を続けることに合意しました。その翌年の 2004 年には、釜山民主公園で開催された「国家均衡発展と地域の国際連帯」という国際シンポジウムに「東アジア学会」から 10 名余りの方々が参加され、一層意義深い催しにすることができました。当時、李南柱先生を特別に招請する予定でしたが、朝鮮総連の身分だったため、残念ながら韓国訪問は成りませんでした。

翌年からは更に進んだ状況で、相互交流・訪問のシンポジウムを拡大しました。2005 年には「東アジア学会創立 15 周年」の大会を兼ねて、北九州市国際会議場の国際会議室で「東アジア地中海の時代を拓く」というテーマで盛大なシンポジウムが開催されました。その時には、日本と韓国だけでなく中国の北京と上海、香港や台湾など東アジア各国から多くの学者たちが参加しましたし、釜山からも私どもの「ビジョンと連帯 21」をはじめ、釜山地域の市民社会研究院、釜山発展研究院、日本地域研究会、釜山中国研究会など各界を代表する機関と個人など 20 人余りが参加して盛会となりました。

2006 年には韓国海洋大学を会場に「超広域経済圏」の議論を始めました。「釜山と福岡共同繁栄の道」というメインテーマの下に、「九州と釜山の共同発展戦略―経済・地域金融・物流」、「九州と釜山の海洋環境保全と観光交流協力」、「東アジアの社会文化共通認識―漢字文化・東アジア国際秩序」といった個別テーマを掲げ、韓日の専門家 50 人余りが集まって、掘り下げた議論を行いました。

2007 年に西南学院大学で開催された共同シンポジウムでは、「東アジア共同繁栄の道」というメインテーマの下に、政治分科会では「東アジアの平和と“分断国家”韓国」、「韓日関係の構造転換と方向性」、「東アジアの平和と日本」などを議論しました。また、経済分科会では「自動車部品メーカーの随伴立地の韓日比較」、「釜山の主要輸出産業における産業内生産段階別の特化構造に関する分析」、「クラスター政策と地域革新の課題」、「日本物流企業による釜山新港後背団地の戦略的活用の可能性」、その他に「韓日海峡圏における観光交流のあゆみ」、「インターネットを活用した釜山―九州間における観光の活性化方策」などについても議論しました。

2008 年には「東アジア学会」の会長である徳島先生と多くの会員たちが釜山を訪ねてきました。その年は韓国海洋大学の実習船で開催しましたので、印象深い研究会となりました。韓日両国共通の関心事であった韓日超広域経済圏と「釜山・東南経済圏と福岡・九州圏との連帯および共同発展方策の摸索」という趣旨の下に「釜山と福岡間の超広域共同体の推進現況と今後の発展戦略―東南広域経済圏の構築を中心に」をメインテーマとしました。なぜなら、釜山・蔚山・慶南を合わせた東南経済圏と福岡九州地域とが経済的に統合された場合、約 2,200 万の人口を持つ巨大経済圏として浮上する可能性があるからです。それだけでなく、これに伴いグローバル化と地域化を共に跳び越えた地域連帯の構築を通じてクロスボーダー型の超広域地域空間構想が可能になります。釜山と福岡は超広域地域空間を構築することで共同繁栄戦略を模索できますし、両地域の共同研究はもちろん協力可能な具体的アイテムとアイディアを開発することもできます。

2009 年、第 7 回目となる「ビジョンと連帯 21・東アジア学会共同シンポジウム」が再び福岡で開催されました。文化・政治・経済・観光といった 4 分科会を設けたこともあって、韓国からは最大規模の総勢 26 人が参加し、熱を帯びた討論を展開しました。

このように、私たちの「ビジョンと連帯 21」と「東アジア学会」は、これまで 8 年間の歳月を共にしつつ、両地域の様々な問題を深く議論し、一つ一つその解決方策を導き出すための努力を傾けてきました。振り返ってみれば、瞬く間に過ぎ去った歳月でしたが、私たちが共同で作り出した成果は決して簡単に消される程軽いものではないということが分かります。毎年シンポジウムの企画で私とともに悩みをやり取りした小川雄平教授をはじめ、安達義弘教授、森善宣教授など、忘れられない方々がたくさんいらっしゃいます。その中でも特に「ビジョンと連帯 21」を「東アジア学会」に紹介して縁結びをして下さった金英哲先生に深く感謝を申し上げます。両地域の先生と各界の専門家たちが今後とも長く共同繁栄のための研究と協力、そして友情をより一層高く積み上げられるように切に願っています。

「東アジア学会」は 20 周年を迎えるまでに大きく発展してきました。「ビジョンと連帯 21」と一緒に歩んできた歳月がその内の 8 年を占めるという事実に私どもも驚い

ています。これからも一層発展して 20 年、40 年と年輪を重ね、日本を代表する「知的ネットワーク」の精髄であり続けられるように願ってやみません。私どもの「ビジョンと連帯 21」も今年 10 周年を迎えますので、来月には 10 周年の行事を行う予定をしております。「東アジア学会」からも多くの方々にお越しいただき、共に祝っていただきますようお待ち申し上げております。

（2010 年 7 月）

東아시아學會와 韓日兩國의 地域間交流

釜山廣域市議會政策硏究室長　朴 明欽

1990 年代 初, 釜山을 中心으로 하는 嶺南地域의 學者들과 硏究者들이 모여 韓國東아시아硏究會를 結成하여 硏究活動을 해 오다가, 1992 年 1 月에 韓國東아시아學會가 發足되어 다음 해인 1993 年 4 月부터 本格的인 活動을 展開하였다.

初代會長으로 當時 東南開發硏究院(1994 年부터 釜山發展硏究院)의 姜泳秀院長이 選出되었고, 當時 日本 九州圈을 中心으로 學會活動을 하고 있던 日本의 東아시아學會와는 實質的인 姉妹學會로서의 關係를 맺으면서 韓日兩國의 學會가 共同 硏究活動을 하여 왔다. 當時 日本 東아시아學會는 木下悅二會長(下關市立大學長),林一信九州國際大學敎授, 小川雄平西南學院大學敎授, 櫻井浩久留米大學敎授等을 비롯하여 많은 學者와 硏究者가 모여、活潑한 硏究活動을 하고 있는 모습이 印象 깊게 남아 있다.

韓日 兩 學會는 各 學會의 會員들이 隔年制로 相對國을 訪問하여 韓日共同으로 東아시아學會를 開催하여 왔다. 共同學會는 單純한 硏究活動 뿐만 아니라 相對地域의 政治, 經濟, 社會, 文化, 歷史, 敎育, 環境問題 等 多方面에 걸친 比較硏究, 地域硏究는 勿論 現場 視察을 通한 實質的인 調査活動도 함께 하여 왔다.

지나간 學會活動 가운데 특히 韓日 兩 學會 또는 兩 地域과 連繫하여 推進한 事業을 整理해 본다. 그 첫 번째가 韓日 兩 學會가 共同으로 開催한 學會가 1993 年 7 月 日本 久留米市에서 開催된 學會였다. 學會를 마치고는 日本에서도 有名한 브리지스톤 株式會社를 訪問하였는데, 日本 留學時節에 이름만 들었던 브리지스톤의 據點工場이 九州의 地方都市인 久留米市에 있었다는 것을 처음 알게 되었고, 現地工場을 訪問하는 機會가 주어져 韓國側 參加者는 모두들 기뻐하는 모습들이었다.

世界經濟의 블록화 潮流에 맞추어 東아시아에서도 블록經濟의 必要性이 提起되어, 日本 東아시아學會에서는 設立 5 周年을 記念하여 '포스트 冷戰과 東아시아 局地的 經濟圈'이라는 테마로 1995 年 7 月 北九州市 國際東아시아 硏究센터(ICSEAD)에서 學會를 開催하였다. 이 學會에 韓國 東아시아學會는 日程이 如意치 않아 合同參加는 못하였으나, 姜泳秀 韓國側 會長만 參加하여 祝賀의 뜻을 전하며 東아시아 局地 經濟圈에 對한 所見을 밝히기도 하였다. 같은 해 11 月부터는 韓國東아시아學會 會長으로 金日坤 釜山發展硏究院長이 맡게 되었다.

1996 年 2 月에는 日本 佐賀縣에서 ‘韓日海峽經濟圈과 地方發展’이라는 主題로 韓日東아시아學會 合同세미나를 開催하였다. 1年 前의 東아시아 局地經濟圈에 대한 硏究發表에 이어 韓日 兩 地域間 가장 密接한 關係에 놓여 있는 韓日海峽經濟圈에 대한 本格的인 論議와 그 可能性을 살펴보았고, 이 海峽經濟圈을 通하여 韓國의 東南圈과 日本 九州圈의 共同發展 方案을 摸索해 보았다는 點에서 共同學會가 가지는 意味는 매우 컸다.

이어서 같은 해인 1996年 8月에는 韓國과 日本을 넘어 中國을 包含한 3個國의 硏究者들이 中國 瀋陽市에서 '東아시아地域의 協力과 投資環境'이라는 主題로 韓日中學會가 共同세미나를 開催하였다. 이 共同세미나는 東北亞地域의 韓中日 3 個國의 學會가 함께 처음으로 開催하는 것이 되어 韓日中間 學會의 連繫可能性을 찾아 볼 수 있는 契機가 되었다. 中國에서 開催된 共同세미나를 契機로 하여 韓國과 日本 그리고 中國을 對象地域으로 하는 東아시아學會를 結成하는 方案도 論議되었는데, 實現은 보지 못했다.

다음 해인 1997 年 2 月에는 日本 佐賀縣 伊万里市에서 ‘東아시아의 都市間連繫와 地域發展’이라는 主題로 韓日東아시아學會 共同세미나를 開催하였다. 伊万里市는 壬辰倭亂 當時 日本으로 連行되어간 朝鮮의 陶工들의 哀歡이 서려 있는 地域으로 여기 저기 많은 痕迹이 남아 있었다. 特히 連行된 以後 돌아갈 수 없이 望鄕歌만 부르다가 그곳에서 生을 마감한 無 緣故 陶工들의 慰靈碑 等을 參拜하기도 하였다. 韓日間의 歷史가 남긴 슬픈 痕迹들을 접하는 學會 회원들은 모두 肅然한 마음이 들었고, 이러한 歷史的 文化的 背景을 가지고 있는 兩地域間의 硏究와 學術交流가 갖는 意味는 실로 크다는 점을 다시 한번 認識할 수 있었다.

1997年에는 釜山에서 第20回 東아시아競技大會가 開催되었는데, 이를 記念하기 위한 東아시아국제심포지엄이 같은 해 4 月에 ‘21 世紀 東아시아의 共同繁榮과 새로운 發見’이라는 主題 아래 韓國東아시아學會 主管으로 開催하였다. 韓國, 日本, 中國, 카자흐스탄, 몽골 등에서 東아시아 問題의 專門家들이 대거 參加하여 열띤 發表와 討論이 이루어졌다. 日本 東아시아學會에서는 小川雄平理事가 參加하여 ‘東아시아의 經濟的 逆動性, 그 課題와 展望’에 관한 討論을 하였다.

같은 해 1997 年 11 月에는 韓國 梁山 通度寺에서 ‘韓日海峽圈에 있어서 技術交流와 協力’이라는 主題로 韓日東아시아學會 共同國際심포지엄이 열렸고, 學會가 끝난 後에 日本에서도 井戶茶碗의 復元陶藝家로 널리 알려진 申正熙窯를 訪問하기도 하였다.

IMF體制下의 經濟危機가 到來하자 1998年 3月에는 韓日兩國의 東아시아學會가 앞장서서 ‘IMF 體制下의 東아시아 經濟危機와 地域間 國際協力’이라는 主題로 釜山의 요트競技場 國際會議場에서 韓日國際學術 심포지엄이 開催되었다. 같은 해

8 月에는 安東에서 '아시아的 價値觀이란 무엇인가?'라는 主題로 韓日東아시아學會의 合同세미나를 開催하였는데, 이 合同세미나에는 특히 退溪 李滉先生의 15 代 宗孫인 李東恩先生을 모시고 招請스피치를 들었고, 끝난 후에는 李滉先生이 設立한 陶山書院과 西涯 柳成龍의 가문인 豊山柳氏들이 600 餘年間 살아 온 集姓村 河回마을을 訪問하기도 하였다. 1998 年 12 月부터는 韓國東아시아學會長으로 釜山大學校 林正德敎授(3 代釜山發展硏究院長)가 맡게 되었다.

1999 年 7 月에는 日本 大分縣 住吉浜리조트 파크에서 '自由貿易地域 構想과 韓日政治.經濟.文化.社會'라는 主題로 韓日東아시아學會 合同硏究會를 開催하였고. 隣近의 宇佐神宮을 訪問하였다. 같은 해 11 月에는 慶尙北道 浦項市에 있는 浦項 1 大學에서 浦項市制 50 周年記念 國際심포지엄을 開催하고 POSCO 를 見學하였다. 돌아올 때는 壬辰倭亂 當時 沙也可라는 倭軍이 朝鮮으로 歸化하여 살아 온 慶北 達成郡 嘉昌面 友鹿里에 있는 마을을 訪問하였다. 加藤淸正의 右先鋒將으로 朝鮮을 侵略하였다가 平素 禮儀之國으로 欽慕하던 朝鮮에 歸化하여 임금으로부터 金氏의 姓을 下賜 받은 慕夏堂 金忠善의 後孫들이 살고 있는 地域이다. 이곳에는 金忠善의 位牌를 모시고 있는 鹿洞書院이 있어 訪問하였고, 韓日交流 協力의 場으로 開館한 忠節館 等도 參觀하였다.

2001 年 2 月에는 日本 佐賀縣 和田屋別莊에서 '東아시아의 觀光'이라는 主題로 韓日東아시아學會 合同硏究會를 開催하였다. 이 合同硏究會가 끝난 후에는 日本 陶藝産業으로 有名한 아리다야끼(有田燒)의 集散地 아리다(有田)를 訪問하여 現場 調査와 함께 朝鮮으로부터 連行되어간 陶祖 李參平碑도 參觀하였다.

2002 年 1 月부터는 第 4 代 釜山發展硏究院長으로 赴任한 金鶴櫓院長이 第 4 代 韓國東아시아學會長을 承繼하게 되었다. 2002 年 3 月에는 '地方에서 본 韓日交流史'라는 主題로 釜山發展硏究院에서 韓日合同硏究會를 開催하여 '朝鮮後期의 釜山倭館에서의 經濟交流', '百濟와 九州', '朝鮮通信使와 永嘉臺', '對馬宗家紋樣', '雨森芳洲와 交隣須知' 등에 대한 發表가 있었고, 自由論題로는 '東아시아 基軸通貨', '釜山의 世界都市의 條件', '한 잔의 茶에서 日韓 生活文化交流의 將來를 생각한다' 등에 대한 發表가 있었다. 學會가 끝난 後에는 子城臺를 視察하였다. 子城臺는 宣祖 26 年 倭將 毛利煇元 夫子가 쌓은 日本式 城이다. 釜山鎭城을 母性으로 하고 이에 附屬된 城이라는 意味로 子城臺라 하였다. 城의 築造法이 日本式으로 되어 있어 壬辰倭亂 前後의 日本城의 痕迹을 읽을 수가 있다.

2002 年 11 月에는 北九州의 國際東아시아연구센터에서 韓日東아시아學會 合同硏究會가 開催되었다. 특히 이 合同硏究會에서는 九州를 中心으로 한 젊은 硏究者들의 硏究報告 機會가 주어져 福岡의 各 大學院生 및 젊은 硏究者들의

研究報告가 많이 發表되기도 하였다.

以上에서 본 바와 같이 日本의 東아시아學會와 韓國東아시아學會는 거의 每年 相互 訪問하여 合同研究會 開催하던가, 아니면 獨自的인 學會活動을 展開하여 왔으나, 2003 年부터는 韓國東아시아學會가 學會를 둘러싼 周圍 與件의 變化로 學會活動이 어렵게 되어 現在까지 거의 休眠 狀態를 維持해 오고 있다. 한편 日本 東아시아學會는 韓國의 다른 研究團體와 合同研究會를 비롯한 研究交流를 해 오고 있는 中이다.

韓國東아시아學會가 거의 休眠狀態를 繼續한지가 6,7年이 經過한 2009年 10月 日本 東아시아學會와 韓國의 (社)東北亞未來 FORUM 과 共同으로 '21 世紀 東北아시아의 平和와 共同繁榮을 위한 靑年들의 役割과 課題'라는 테마로 九州國際大學에서 第 2 回東北亞靑年國際심포지엄을 開催하였다. 共同主催機關으로 韓國海洋大學校, 日本의 九州國際大學校, 西日本工業大學校 等이 參加하였다. 2010年 9月에는 第 3 回東北亞靑年國際심포지엄을 中國 상하이에서 開催한다.

韓日 兩地域의 東아시아學會間 研究 및 國際交流의 意味와 實績을 비추어 볼 때, 兩地域間의 交流와 協力關係에 至大한 貢獻을 하였음을 否認할 수가 없다.
本人은 個人的으로 研究領域以外에도 日本 全國과 交流活動을 하기 위해 設立된 釜山韓日文化交流協會의 運營에도 參加하고 있는데, 그 가운데 九州와는 特別하게 交流實績을 많이 쌓고 있다. 日本의 東아시아學會와의 交流活動을 통하여 더욱 많은 交流와 協力을 할 수 있었다는 점에 대하여 個人的으로도 더 할 수 없는 좋은 機會였다고 생각한다.

따라서 向後 언젠가는 韓國東아시아學會의 復活과 함께 從前처럼 韓國의 東南圈과 日本의 西南圈 지역간의 活潑한 研究活動과 國際交流 및 協力關係를 鞏固히 해 나가길 다시 한번 期待해 본다.

東アジア学会と日韓両国における地域間交流

釜山広域市議会政策研究室長　朴 明欽
(日本語訳：姜 文淑)

1990 年代の初め、釜山を中心とする嶺南地域の学者・研究者が集まって韓国東アジア研究会を結成し、研究活動を始めた。1992 年 1 月には韓国東アジア学会が発足し、翌年の 1993 年 4 月から本格的な活動を展開した。

初代会長には東南開発研究院(1994 年から釜山発展研究院)の姜泳秀院長が選ばれた。当時日本の九州圏を中心に学会活動を行っていた日本の東アジア学会とは、実質的な姉妹学会としての関係を維持しながら、日韓両国の東アジア学会が協同研究を行ってきた。当時、日本の東アジア学会は、木下悦二会長(下関市立大学長)、林一信九州国際大学教授、小川雄平西南大学教授、櫻井浩久留米大学教授をはじめ、多くの学者・研究者が集まって活発な研究活動を行っている姿が印象に深く残っている。

日韓両学会は、それぞれの学会の会員が隔年で相手国を訪問し、日韓共同で東アジア学会を開催してきた。協同学会は研究活動だけではなく、相手地域の政治、経済、社会、文化、歴史、教育、環境問題など、多方面にわたり比較研究や地域研究はもちろん、現地視察を伴う実質的な調査活動も行ってきた。

ここで、これまでの学会活動の中でも特に日韓両学会または両地域と連携して進めてきた事業について振り返ってみよう。1993 年 7 月に日本の久留米市ではじめて日韓共同の学会が開催された。学会が終わって日本の有名なブリジストン株式会社を見学する機会に恵まれた。日本留学時代に社名だけは知っていたが、そのブリジストンの拠点工場が九州の地方都市である久留米市にあるということは初めて知った。現地工場を見学する機会が与えられ、韓国側の参加者は全員喜んでいる様子だった。

世界経済のブロック化の流れに合わせ、東アジアでもブロック経済の必要性が提起され、1995 年 7 月に日本東アジア学会設立 5 周年を記念し、「ポスト冷戦と東アジア局地的経済圏」というテーマのもと、北九州市国際東アジア研究センター(ICSEAD)で学会が開催された。この学会では、韓国東アジア学会との日程が合わなかったために合同参加はできなかったものの、姜泳秀韓国側会長が出席し、祝賀の意を伝えるとともに東アジア局地経済圏についての所見を述べた。同年 11 月からは、金日坤釜山発展研究院長が韓国東アジア学会会長を務めるようになった。

1996 年 2 月には、日本の佐賀県で「日韓海峡経済圏と地方発展」というテーマで、日韓の東アジア学会合同セミナーが開催された。1 年前の東アジア局地経済圏についての研究発表と日韓両地域間にとってもっとも密接な関係にある日韓海峡経済圏に関する本格的な議論や、その可能性について意見交換し、この海峡経済圏を通じて韓国

の東南圏と日本の九州圏の協同発展法案を模索したという点で協同学会開催の意味合いは非常に大きかった。

さらに同年 8 月には、韓国と日本を超えて中国を含めた 3 カ国の研究者が中国の瀋陽市で「東アジア地域の協力と投資環境」というテーマで、日中韓の学会が協同セミナーを契機に、日本と韓国・中国を対象地域とした東アジア学会を結成する方案についても議論されたが、実現しなかった。

翌年 1997 年 2 月には、日本佐賀県伊万里市で「東アジアの都市間連携と地域発展」というテーマで日韓東アジア学会協同セミナーが開催された。伊万里市は文禄・慶長の役当時、日本に連れて行かれた朝鮮陶工の哀歓が込められている地域でもあって、ところどころにその痕跡が残されていた。連れてこられた後、帰れぬまま望郷の歌を歌い続け、結局そこで一生を終えてしまった無縁故陶工の慰霊碑などにも参拝した。日韓間の歴史が残した悲しい痕跡に接した学会会員は皆厳かで静かな気持ちになっていた。このような歴史的・文化的背景をもつ両地域間の研究および学術交流の意味は実に大きいということを改めて認識することができた。

1997 年に釜山で第 20 回東アジア競技大会が行われた。これを記念するために同年 4 月には、「21 世紀東アジアの共同繁栄と新たな発見」というテーマの東アジア国際シンポジウムが、韓国東アジア学会の主催で開催された。韓国、日本、中国、カザフスタン、モンゴルなどから東アジア問題の専門家が多く参加し、熱を帯びた発表と討論が行われた。日本東アジア学会では、小川雄平理事が出席し、「東アジアの経済的逆動性、その問題と展望」に関する討論を行った。

当年 11 月には、韓国梁山にある通度寺で「日韓海峡圏における技術交流と協力」というテーマで、日韓東アジア学会共同国際シンポジウムが開かれた。学会終了後、日本でも井戸茶碗の復元陶芸家として知られる申正熙窯を見学した。

IMF 体制下の経済危機が到来し、1998 年 3 月には日韓両国の東アジア学会が先頭に立って、釜山ヨット競技場にある国際会議場で「IMF 体制下の東アジア経済危機と地域間国際協力」というテーマの日韓国際学術シンポジウムが開催された。同年 8 月には、安東で「アジア的価値観とは何か」というテーマで日韓東アジア学会の合同セミナーが開催された。とくに、この合同セミナーでは、退渓李滉先生の 15 代目子孫である李東恩先生の特別講演が行われた。その後、李滉先生が設立した陶山書院を見学し、また西涯柳成龍の一族である豊山柳氏が約 600 年前から生活しつづけてきた集姓村の河回村を訪問した。1998 年 12 月からは、釜山大学校の林正徳教授(3 代目釜山発展研究院長)が韓国東アジア学会長になった。

1999 年 7 月には、日本大分県住吉浜リゾートパークで「自由貿易地域構想と日韓政治、経済、文化、社会」というテーマで、日韓東アジア学会合同研究会を開催し、近くの宇佐神宮をも見学した。同年 11 月には、慶尚北道浦項市にある浦項一大学で、浦

項市制 50 周年を記念する国際シンポジウムを開催し、POSCO を見学した。帰途には、文禄・慶長の役当時、沙也何という倭軍が朝鮮へ帰化して暮らしていた慶尚北道達成郡嘉昌面友鹿里にある村を訪ねた。加藤清正の右先鋒将として朝鮮を侵略したものの、普段から礼儀の国として欽慕していた朝鮮に帰化し、国王から金氏の姓を授かった慕夏堂金忠善の子孫が住んでいる地域である。ここでは金忠善の位牌が祭られている鹿洞書院や日韓交流協力の場として開館された忠節館なども見学した。

2001 年 2 月には、日本佐賀県和田屋別荘で「東アジア観光」というテーマで、日韓東アジア学会合同研究会を開催した。この合同研究会終了後、日本の陶芸産業で有名な有田焼の集散地である有田を訪ね、現地調査を行い、朝鮮から連れて行かれた陶祖李参平碑も見学した。

2002 年 1 月からは第 4 代目の釜山発展研究院長に赴任した金鶴檜院長が第 4 代目の韓国東アジア学会長を受け継いだ。2002 年 3 月には「地方から見た日韓交流史」というテーマで、釜山発展研究院で日韓合同研究会を開催し、「朝鮮後期の釜山倭館における経済交流」、「百済と九州」、「朝鮮通信使と永嘉台」、「対馬宗家紋様」、「雨森芳洲と交隣須知」などについての発表が行われ、自由テーマとしては「東アジア基軸通貨」、「釜山の世界都市としての条件」、「いっぱいのお茶から日韓生活文化交流の未来を考える」などについての発表が行われた。学会終了後、子城台を視察した。子城台は、宣祖 26 年倭将毛利燁元によって築造された日本式城である。釜山鎭城を母城と見なし、これに付属された城という意味で子城台と名付けられた。城の築造法が日本式なので壬辰の倭乱前後の日本城の構造を知ることができる。

2002 年 11 月には、北九州の国際東アジア研究センターで、日韓東アジア学会合同研究が開かれた。とくに、この合同研究会では、九州の若手研究者に研究報告の機会が与えられ、福岡の各大学院生および若手研究者による研究発表が活発に行われた。

以上のように、日本の東アジア学会と韓国東アジア学会はほとんど毎年相互に訪問し、合同研究会を開催したり、独自の学会活動を展開してきたが、2003 年から韓国東アジア学会では、学会をめぐる周辺の状況変化のために学会活動が困難になり、現在までほとんど休眠状態が続いている。一方、日本東アジア学会は韓国の別の研究グループと合同研究会を開くなど、現在も研究交流を続けている。

韓国東アジア学会の活動が中止して 6、7 年が経過した 2009 年 10 月、日本東アジア学会と韓国の(社)東北亜未来フォーラムと共同で、「21 世紀東北アジアの平和と共同繁栄のための青年の役割と課題」というテーマで、九州国際大学で第 2 回東北亜青年国際シンポジウムが開催された。共同主催機関として韓国海洋大学校、日本の九州国際大学、西日本工業大学などが参加した。また、第 3 回東北亜青年国際シンポジウムは 2010 年 9 月に中国の上海で開催される予定である。

日韓両地域の東アジア学会間の研究および国際交流の意味と実績を振り返ると、両

地域間の交流と協力関係に多く貢献できたことは否認できない。私は、私的に研究領域以外にも日本全国と交流活動を行うために設立された釜山韓日文化交流協会の運営にも関わっているが、なかでも九州とはとくに多い交流実績を積み重ねてきている。日本の東アジア学会との交流活動を通して、より多くの交流と協力ができたことについては、個人的に何より良い機会であったと考える。

したがって、今後、韓国東アジア学会の復活とともに、以前のような韓国の東南圏と日本の西南圏地域間の活発な研究活動と国際交流および協力関係を固めていくことを期待する。

東アジア学会と私
― 学問への旅を終えて ―

中国・吉林大学元博士指導教授　趙 鳳彬

Ⅰ．はじめに

私が東アジア学会に入会したのは、1998 年４月、福岡筑紫女学園大学アジア学科に就任したころである。当学会の小川雄平西南学院大学教授のご案内によるが、その前にも数回、福岡の皆さんと交流するチャンスはあった。それは私が小川先生と長年付き合ってきた縁があったお陰だが、私自身この学会に相応しい人間だと考えている。その後、私は 2003 年３月に帰国するまでの間、一時当学会の理事を務めたこともあって、東アジア学会は私にとって、身近な交流の場となった。なお、2008 年夏、私が再び福岡を訪問した際にも、当学会において特別講演を行うなど学会との交流は断続的に続いている。

東アジア学会が私にとって「身近な交流の場」であったというのは、まず第１に、学会の「地域指向性」にある。いわば「東京―北京」「ソウル―東京」というラインを中心に考える他のアジア関係の学会とはその運営方針が違う。何時か福岡県知事から「福岡―上海は、まさに福岡―東京と同距離にあります」と言われたことがある。周辺アジア地域を同列において国際化を進めるという意味だろう。当学会は地政的にも重要な位置にある。実際に、学会の海外交流は、すべてが東アジアの地方レベルの交流であった。小川先生が主張する「東アジア地中海」との交流、環渤海・黄海地域間交流を中心とした「地方の国際化」にスポットを当てた交流である。

その第２は、学会の「包容性」または「開放性」があげられる。それは主に会員の構成にみられるが、なかには大学教授ら東アジア専門の学者もあるが、そのほかにも、アジアに関係のある企業家、マスコミ関係者、公務員、普通の社会人も入会している。日本滞在の中国や台湾の学者、また「在日」の方々等外国人会員もおられる。なお「海外会員」も少なくない。まさに東アジアの「地方の国際化」に相応しい会員たちから構成されている。

その第３は、研究のありかたにおける「独自性」または「多様性」があげられよう。地方の国際化を中心に、独自の考え方や色々な選択肢をもっていて、研究成果も多岐にわたっている。北朝鮮問題についての研究もその１例である。学会は、拉致問題で北朝鮮との関係が非常に冷え込んでいたころ、独自に情報の収集に努めてきた。小川先生自身、厚い政治の壁を乗り越えて現地にはいり、生の情報を収集したこともある。学会はまた、いわゆる「在日社会」との交流も真剣に進めている。互いに共同シンポジウムを開催したが、私は小川先生とともに発表したこともある。そのお陰で私は、

「在日」のアジア問題学者や会社員とも付き合うことが出来た。お世話になったことも少なくない。

東アジア学会の国際交流は、何よりも国境ならび民族の壁を越えた人間同士の「おもいやり」の文化的交流のイメージが強い。国際交流の「人間性」―ここに学会の意義を与えたい。紙面の関係上一々お前を挙げられないものの、私がお世話になった徳島千顕会長をはじめ会員の皆さんに、記して感謝の意を表したい。今後、学会の一層の発展と諸先生のご健勝を心からお祈り申し上げる。

Ⅱ．私の「二つの顔」との初対面

私事にわたって恐縮だが、私の一家は 20 世紀の初めからこれまでの間、中国・日本・朝鮮半島の三地域を何度も行き来しながら生きて来た。1998 年の春、私が福岡の大学に就任して間もない頃、小川先生が主催した学会の懇親会に招かれたことがある。この席上、関連資料まで配ってご丁寧に紹介していただいた。その資料は 1988 年 1 月 13 日に中国の拙宅で行った、私と小川先生との対談録である。「二つの顔―ある朝鮮系中国人の戦後史」がそれであるが、小川先生と私が企画した『韓国経済の分析』（日本評論社、1988 年刊）にも収録され、その本はよく売れたそうだ。

私の場合は歴史の背景が複雑と言えばそうかも知れない。私は 1932 年３月、朝鮮中部（江原道金化郡遠東面）に生まれた。そして 1938 年 12 月、列車やバスで中国遼東省（現遼寧省）桓仁県の田舎に移住してきた。「在中一世」である。しかし二人の兄は在中二世で、朝鮮平安道定州から亡命した祖父の旧満州における反日独立闘争の戦地に生まれた。祖父が亡くなった後、関東軍の討伐を逃れるため、朝鮮半島の中部山地に逆戻りしたが、その時私が生まれたのである。しかし、日本の植民地支配下の朝鮮でも安定した生活はできず、父は上の兄の志願兵徴兵を避けるため、一家をつれてまた中国満州に渡ってきた。朝鮮平安北道定州―満州遼東省桓仁―朝鮮江原道金城の間の遠い道のりである。満州から来るときには、軍警の眼を避けて半島の半分に相当する道のりを、幼い下の兄を背おって徒歩で来たという。苦難の旅である。これは決して私一家のみの遭遇ではない。

また、私の一家が暮らした満州は決して「王道楽土」ではなかった。私はこの間、朝鮮人―日本帝国臣民―満州帝国国民―無国籍朝鮮人―中国系朝鮮人―中国朝鮮族といういくつかの国家帰属変動を辿ってきた。私は東アジア（北東アジア）における国家と民族のせめぎあいの中で生きてきた人間である。これがまさに 200 万「中国朝鮮族」の歴史である。

私が専任教授として所属していた福岡筑紫女学園大学アジア学科のゼミ生から、次のような質問を受けたことがある。「先生は中国人ですか、それとも朝鮮人？」「先生の故郷は何処ですか？」「先生は在日朝鮮人と何が違います？」「二人の兄様は在

中二世なのに、なぜ先生は一世なの？」…。彼女達からみた限り、私は不思議な人間である。私の曖昧な民族性が発生した歴史的背景についてよく理解できないらしい。そして東アジアの歴史的原点について、何となく「不思議」に思われるようだ。

私の主体意識（identity）は中国人意識といえる。しかし故郷への想いは今なお変わっていない。いや私の「白衣民族」意識は過去に倍して日増しに強くなる。「名山金剛山の三日浦近くにある生まれ故郷へはいつ帰れようか…」。この世を去るまでに、「その日」が来るよう祈り続けたい。もっとも、はっきり言って、その民族意識というのは、今日の南北国家体制とは無関係である。

なお、一時中国における「無国籍外国人」だった所以は、日本の敗戦によって、旧満州国が崩壊してから、新中国政権が成立するまでの国共内戦期がそれである。世界中に、このような「外国人」がまたあるだろうか。この５年間、朝鮮半島に帰国した多くの朝鮮人を除くと、約 80 万の朝鮮人が中国東北地域を中心に、どのクニにも属しない外国人－朝鮮人として暮らした。もちろん私共の民族意識は変わっていない。何時かは「帰国」するだろう、いや「帰郷」するだろうと思いながら、多難な異郷に生きてきたのである。しかし、当時の半島には我らを迎えてくれる「国」はまだ生まれていない。南北のどのクニも私一家を暖かく迎えてくれなかった。

1949 年 10 月の新政権成立によって､私共にすぐ中国の国籍が与えられたのかといえば、そうでもなかった。その後、朝鮮戦争期・過渡期を経て、1954 年ころ国会に当たる全人代の憲法採択、延辺朝鮮族自治州の成立により、いわば「上」からの意思決定にしたがって中国への帰属が一応決まった。もっとも、国籍法による法的手続きはなかった（中国の国籍法は 1980 年９月採択）。そして「朝鮮族」という概念が公式に流行し始めたのは、1957 年のいわゆる「反右派運動」という政治キャンペーン以降になる（１）。

Ⅲ．中国における歴史的教訓を考える

私はもう「過去」に生きる人間である。この機会に日本滞在 10 年間の、いわば中国の「外側」から考えてきた「東アジアの社会主義問題」について回顧してみたい。

私が入会した翌年、中華人民共和国成立 50 周年を迎えた。それを機に東アジア学会は全国的シンポジュウムを福岡で盛大に開催したが、光栄にも私がその基調報告を担当することになった。報告の趣旨は、中国には「失われた 10 年―文革期」があると同時に、その後一転して「改革開放」の繁栄期を迎えたが、その紆余曲折を招いた理念的原点は一体どこにあるのか、という問題であった。

中国の近現代史は主に３名の政治家、すなわち「革命の父―孫文、建国の父―毛沢東、富国の父―鄧小平」に代表される。ところが、中国問題の原点は 20 世紀初頭の孫文時代（1866－1925）に遡る。清朝帝国支配に終止符を打った孫文の辛亥革命は、中

国におけるブルジョア民主主義革命の最初の試みであった。孫文は「三民主義」の理念に基づいて、清帝国の君主専制の廃止、共和政治の実施、実業救国、西洋先進資本主義各国との提携などの政策構想を打ち出した（２）。また、ソ連ならび共産党との連合を果たし、「新三民主義」への転換、第２次革命・北伐戦争の遂行などで一応の勝利を収めたが、結果的には未完の革命に終わった。ブルジョア的民主主義革命の終焉といわれている。

「孫文後の中国」は、ブルジョア革命の続行かそれとも社会主義革命かといった歴史の転換点に達していた。日本でもそのころ、「講座派」と「労農派」との間にそれに類した論戦があっが、中国の民主主義・社会主義者の間では、これからの進路は、民主主義か社会主義か、「旧民主主義」か「新民主主義」かの激しい論戦があった。中国の運命にかかわる論争である。蒋介石の著書『中国の命運』もこの時代に書かれたものである。1927 年４月、国共連合による北伐革命中、国民党蒋介石の「血の４．12」事件後、中国共産党は日本軍の満州事変と中国侵略を背景に、国民党の『中国の命運』に応える独自の建国方針を打ち出した。一旦孫文のブルジョア革命的新三民主義を継承する形で、マルクス主義に立脚して書かれた毛沢東の著書『新民主主義論』がそれである（３）。すなわち、中国の半植民地・半封建制社会構造のもとでは、まず第１段階として、ブルジョア的「民主主義」を遂行し、プロレタリア的「社会主義」への移行は「その後」になる。なぜならば、中国はまず「資本主義の広範な発展」、「その客観的要求である資本主義発展への道を拓くこと」を最初に解決しなければならないからだ。これが国民党など各政治勢力による連合政権、ならび社会主義経済・民族資本主義経済・個人経営などを含む多種経済形態の共生を提唱した「新民主主義社会」構想である。私はこの「毛沢東構想」を高く評価したい（４）。

しかし、1949 年 10 月共産党が単独で政権を執った後、朝鮮戦争が終結したころ、毛の連合政権構想と「新民主主義社会論」は幻の構想として姿を消した。毛沢東の決断によるもので、早くも 1953 年から土地改革で成立した個人経営を集団化し、民族資本主義経済を国有化する「社会主義革命」を３年たらずで終了させた。「資本主義の広範な発展が許される」筈であった「新民主主義」の社会段階はこのように中国の歴史から消えてしまった。

毛沢東は新中国の建国を主導した偉人である。ところが、彼自身が打ち出した新民主主義社会構想は、この時点で彼自身の決断により流産した。すなわち建国方針の転換・変質である。現代中国問題における政治的ミスは全てここから端を発すると言ってもよいだろう。

毛沢東晩年の最大ミスといわれる「文化大革命」もその原点が建国方針の変質に起因した。最初のボタンを掛け間違ったので、党内「路線闘争」は避けられない。それが毛沢東と劉少奇の間の権力闘争であった。建設の分野においては、1953 年から 65

年の間、一応の成果は収めたものの、いわゆる「大躍進」「人民公社」など急進的方針を打ち出した結果、中国は当時の世界情勢とはかけ離れた方向に走ってしまった。毛沢東の後半生における教訓は遺憾極るものである。

一方、鄧小平時代の中国をどう評価すべか。鄧小平は毛沢東時代の指導者の一人であると同時に、文革の犠牲者でもある。鄧は毛沢東時代後半期への反省に基づいて、1978 年前後、文革政治の終結と指導体制の平和的再編に成功した（５）。彼の政治手腕は高く評価すべきだ。よって彼は改革開放化を主導して、市場経済体制を積極的に取り入れる新しい方針を打ち出した。権力移行と政策転換をともに成功させた。歴史に残る偉大なる業績と言えよう。

ところで、鄧小平による改革開放化の原点は毛沢東の「新民主主義社会」構想にある。鄧小平は新しい環境のもとで、「新民主主義論」を発展的に継承した。共通点は社会主義と資本主義の共生による近代化政策である。この政策の基本理念は次のように要約できる。すなわち、市場経済と資本制生産様式がまだ生産力の発展への肯定的システムとして歴史の使命を果し切っていない時代において、それらを「革命の対象」として廃止する如何なる政策も結局失敗せざるを得ない。なぜならば、「資本制的生産の発展ばかりでなくその欠如も我々を苦しめている」からである（６）。

鄧小平型改革開放路線の登場はこうした理念に基づくものである。今日、中国の経済的成果はとりわけ鄧小平の新社会主義認識に起因するところが多い。生産力第一主義、「市場経済イコール資本主義ではない」、「貧乏な国は社会主義の資格がない」などは有名だが、彼が目指すのは中国の近代化、富国化、強国化である。

その一方で、現在の中国は貧富格差の拡大、地域格差の拡大や政治腐敗の蔓延など問題は山積しているのも事実だ。要するに、中国はいま、新旧システムの衝突、地域格差と民族摩擦の問題、「政治の上部構造」と「国民の下部構造」間のギャップなど市場の「負の側面」からくる厳しい挑戦に直面している。それは本来、「市場経済」は原理的にこうした二面性を構造的に内包するシステムである。胡錦濤の「科学的発展論」「調和的社会論」はこうした問題への処方といえよう。

鄧小平は生前、共産党主導による政治改革をも提起したが、中国の事情からみて、議会制政権構想は非現実的といえよう。彼は共産党単独政権における「１人独裁」の廃止を強く訴えた。しかし、彼の民主化改革は天安門事件に見られように、残念ながら未完に終わった。中国型政治改革はこれからが正念場といえるが、これは今後の「ポスト鄧小平時代」における課題でもある。

鄧小平の今一つの功績は台湾問題に対する新方針を示した点である。そのポイントは「１国２制度」だが、私は「１国２制度」の香港モデルをそのまま台湾問題に適用するのは無理だと考えている（７）。つまり、双方が「一つの中国」に異議を唱えない限り、台湾地域を一つの地方政権として認めるべきだと考えている。いわば「准連

邦制」の「１国３制度」を提案した。今後大陸の社会主義、香港・マカオの資本主義行政自治区、台湾の資本主義自治（地域）政府というところまで踏み込むしかないだろう。

Ⅳ．北朝鮮問題の源流について

私が福岡にいる間、学会では北朝鮮問題についての研究会がしばしば開かれた。北朝鮮問題は東アジアにおける国際政治の焦点であったからである。2001 年夏、私は韓国の釜山東亜大学校であったシンポジウム「韓半島情勢変化と韓日関係」において報告する機会もあった（８）。

筆者は、現在北朝鮮が直面する諸問題は、次のような歴史的事情からその源流を求めるべきであると考えている。

第１は、党内の派閥闘争問題である。戦前の朝鮮には中国共産党のような統一的前衛党がなかった。1928 年、国際社会主義運動の「権威組織」コミンテルンによって解散させられた経緯がある。その背景には若い革命家たち同士の激しい派閥闘争があった。したがって、北朝鮮の権力は日本敗戦後、中国やソ連など海外から帰還したいくつかの派閥ならび国内派閥などで成立した政治的複合体である。そのため戦後の労働党政権は指導部内の根強い派閥体質を抱えてスタートした。金日成の「大国背景」の派閥反対、「事大主義」反対を中心とした「主体思想」は、それ自体正当性がある。その一方で、金日成は戦争中ならび戦後における激しい派閥闘争を強権的に展開する中で、自身への個人崇拝・神格化を余儀なくした。金日成―金正日体制は、旧ソ連から受け継がれたスターリン主義的体質と独自の「主体思想」理念に支えられている「家父長制的システム」である。

第２は、朝鮮戦争の問題である。新政権成立後、中国ならびにアメリカなどを巻き込んだ３年間の朝鮮戦争は、主として金日成の「解放戦争」戦略と李承晩の「北進統一」戦略の衝突によるものだが、国際的には米ソ冷戦の産物である。その時代的教訓を明らかにすると共に、その「傷跡」を如何に治すかが今日の国際的課題である。この冷戦時代の「負の遺産」を直すためには、いまだ為すべき国際的プロセスがあるが、その直接的責任者でもあるアメリカの主動的役割が必要となる。ところが、残念ながらいまの米国にはその戦争への責任感が全くない。

第３は、権力移行の問題である。北朝鮮のいわゆる「世襲体制」においての構造的問題点は、政策転換ならび理念革新の難しさである。金日成体制から金正日体制への移行過程においで、最高指導者は変わったものの、内外政策は基本的に変わっていない。政治理念の革新抜きの政権移行であった。これが北朝鮮における「遺訓政治」の実状である（１０）。もっとも、理念の革新が全く望めないわけでもない。「大いなる経済的失敗」が終局的にものをいうだろう。国民の「下」からの反発は避けられな

いだろう。いずれは画期的な政策転換が必ず生じるだろう。「社会主義権力」さえ守りとおせばよい、という「強盛大国論」は生命力がない。ところが、現在北朝鮮の対外開放政策の面ではかなり前向きの姿勢を見せている。今後こうした「朝鮮式対外開放化」から突破口が開かれるかもしれない。

第４は、指導部の時代認識問題である。この世界はもはや戦争の時代ではない。南北関係と対米関係は基本的に「軍事」それ自体では解決できない。もちろん「安全保障」への関心は十分理解できるが、「最後の賭け」ともいえる核開発政策は放棄すべきだ。まさに外交的知恵が求められる。その上で、アメリカとの関係改善を果たせば、日本との関係も正常な関係に変わる時がくる。ところで、北朝鮮が内外政策の転換に踏み切った場合、経済復興ではむしろ中国より早いスピードで進む可能性も十分ある。その時代がより早く訪れるよう期待してやまない。

第５は、朝鮮式社会主義の問題である。北朝鮮は戦後、殖民地・半封建社会（1910－45）―戦後ソ連占領期（1945－47）―「民主朝鮮」期（1948－50）―朝鮮戦争期（1950－53）―社会主義改造期（1954－58）―社会主義工業化期（1959―）など、という段階をへて今日に至っている。その中の「民主朝鮮」というのは、中国の「新民主主義社会」に相当するが、わずか２年余りで終わった。その後国有化と集団化を中心に社会主義革命が行われ、中国とほぼ同じ時期に、集権的社会主義の成立を宣言した。まさに「アジア後進的社会主義」の誕生である。

従って、筆者は、朝鮮型社会主義の真実を究明するには、やはり相応の「理論的装置」が必要となると考えている。私のこの問題についての研究は、偶然にも 2007 年、韓国南部の都市光州市にある国立大学の特別招聘教授として講義を担当した際に行われた。幸いなことだ。もっとも、それは単なる偶然の出会いではなかったかも知れない。私は 1980 年の「光州事件」の現場を観ながらそう思った。

研究の主題は「マルクスの晩年構想と 20 世紀アジア後進社会主義再考」というものである（９）。韓国の国立大学の刊行物に「マル経」の論文を発表するのは稀に見られるといわれた。マルクス文献への接近を「親北韓」政治犯として追放または取り締まることもあったそうだ。しかし、私は北朝鮮の体制を分析するためには、こうしたアプローチが寧ろ有効だと考えている。そのため、論文の副題を「北朝鮮問題への理念的アプローチ」とした。編集長は皮肉にも「光州はソウルと違いますから」と言い、論文の執筆を許してくれた。私にとっては特別な意味のある論文である。

Ｖ．アジア「後進社会主義」の歴史的地位

2008 年 10 月、私の福岡訪問を機に、東アジア学会において、特別講演会が開かれた。私の報告は「学問への旅を終えて」というものであった。講演の内容は、私が韓国光州発表した論文の主題と概ね一致している。

第１は、マルクスの科学的社会主義論の大枠は、原始制社会―奴隷制社会―封建制社会―資本主義社会―共産主義（社会主義を含む）社会の５段階論である。その中間にある「過渡期」は短期に終わるべき社会主義への移行期であり、独立した社会段階ではない。いわゆる共産主義社会（社会主義はその第１段階）とは資本主義社会の「後」にくるはずの新しい社会である。ところが、20 世紀におけるプロレタリア革命は、すべてが社会主義を目指す革命であった。とりわけ中国や朝鮮の場合は、資本主義的発展段階を経由せずに、植民地・半植民地・半封建的社会から直接社会主義段階へと進んでいる。私はこれを「早産した後進社会主義」と規定した。

第２はマルクスの「晩年構想」である。これはマルクスが晩年の 1881－82 年、19 世紀ロシア社会主義革命を唱えたナロードニキ派の質問に答えるためのアイディアである。その出発点は西欧中心主義的「社会５段階論」がロシアのような後進資本主義国にそのまま適したものではない。つまり、従来の社会主義論に対して部分的な補足を加えた。「マルクス回答」のポイントは、（１）19 世紀のロシアが革命に成功し、社会主義へ進む場合、1861 年ロシア農地改革以後、資本主義の急速な発展、農業共同体の存在などは、経済制度上有利な「直接的出発点」となる。（２）ロシアにおいては、成熟した資本主義社会形態を経過しない、いわば「非西欧－非ブルジョア的社会主義発展」は可能である。（３）その場合において、革命派が政権を執った後、「資本主義制度によって造られたあらゆる肯定的な諸成果を自らの社会の中に組み入れること」、ロシア革命の勝利が「西欧のプロレタリア革命に対し合図となって、両者が互いにに補うこと」などの条件を付けた（10）。この条件付きの社会革命論はナロードニキ流の革命論を理論的に支える一方、また「条件付」でそれとは一線を画すものでもある。この「条件付き」こそ政権獲得の後に果たすべき「最終的勝利」の必要条件である。こうしたマルクスの構想を社会主義革命における「非資本主義的発展の道」と規定している（10）。

第３は、こうしたマルクス構想から考えた場合、アジア社会主義諸国はすべて「非資本主義の道」を選択した「後進社会主義」にあたる。なぜならば、マルクスが提示した内外の諸条件は未だに満たせないからである。毛沢東型社会主義ならび金日成型社会主義はこうした後進社会主義に属する。

第４は、マルクスによる「非資本主義の道」というのは、ロシアならびアジアにおける革命の特別なケースにあたる。いわば特例に過ぎない。マルクス晩年構想の限界がまさにここにある。この点がコミンテルンをはじめ早期社会主義者の社会主義革命論に強い影響を及ぼしたと私は考えている。西欧かアジアか、社会主義か民主主義か、という問題が長年の間彼らの理論的混迷をもたらした。毛沢東の建国後の混迷も、この「マルクス限界」と一脈相通じるところがある。

今日の中国を考えた場合、資本主義が数百年かけて創り上げた文明と生産力を取り

入れることが社会主義の最終的勝利への道である。その反面、こうした改革を断り続けながら、あくまで独裁政権の維持に執念した場合、どうしても何時かは国民の新しい社会革命の対象になりかねない。その必然性を歴史は教えてくれる。

ところが、いま多くの中国人は、中国がこれからも社会主義理念を守り続けていくことは、それ自体結構なことであると考えている。現代の資本主義が内在する諸問題が克服できない限り、それに代わる代替社会形態がどうしても生まれてくる。資本主義にしろ、社会主義にしろ、その自己革新の必然性の中から、新しい社会システムが誕生するかも知れない。「東アジア社会主義」の運命は、これまでの「欧化」か「非欧化」か、「社会主義」か「資本主義」かの次元をのりこえて、世界の「大同」への道が拓かれるか否かにかっていると言えよう（11）。

Ⅵ．おわりに

最後に、改革開放時代における中国外交と日中関係について簡単に触れておきたい。ポスト冷戦時代における中国外交は多彩多様に展開している。いわば「自主的全方位外交」である。そのポイントはつぎの二本柱からなっている。第１は近代化・強国化のための国際環境作りと開発優先外交、第２はグローバル化に対応した多極化外交と平和外交である。日中外交もこの枠組の中で考えるべきだ。

中国の対日外交を読むキーワードは、基本的には「歴史問題」をこえた経済外交に移ってきた、と私は判断する。もちろん中国の主権問題に関する政治的姿勢には変わりないものの、それによって外交の中心点が変わるものではない。摩擦は避けられないだろうが、中国国民の日中外交への期待はいまなお大きい。

今後のカギは東アジアのいわば「似て非なる人間」（似是而非）同士の相互理解にある。全ての民族を同列において相手を考える民族観・価値観が必要である。日中関係の「季節サイクル」があるようだが、いまや日中関係にも希望の「春」が来た。石原（慎太郎）流の「シナ人論」や「中国嫌疑論」はもはやこの「季節」に逆行するものである。

私はちょうど「失われた 10 年」の間、日本の関西地域に滞在した。そのころの日本は世界第２の経済大国、アジア最大の文明国の地位は不動のものであった。今日もそうだが、日本社会は安定した暮らしが出来る美しい国として、諸外国からきた留学生に親しまれている。いま上海万博が開かれている最中だが、広い敷地をもった日本館は中国人が最も多く集まる展示館の一つである。日本館を観るために３時間も待っている。それは単なる先端技術を披露したロボットの人気だけによるものではないと思う。そこには開幕式で谷村新司が歌った名曲「昴・すばる」が聞こえてくる。「我は行く、心の命ずるままに・・・我も行く・・・いつの日か、誰かがこの道を―」。会場の何処かで「日本経済はやはり強い」、「日本の技術はすごい」、「日本文化は美

しい」とささやく若者の声が、「昴」のメロディーに交えて聞こえてくる。中国と日本が共に協力して新しいアジアを創造したいという念願の表れだろう。私はこうした中国人の熱い期待を日本の皆さんに伝えたい。

参考文献

（１）拙著『東北アジアを生きる―あるコリアン系中国人の三国志』日本創言社、2003 年。拙稿「中国の朝鮮族とその文化―跨境民族の文化変容」筑紫女学園大学『論叢』2001 年第 12 号も参照されたい。

（２）『孫文全集』第１巻、560 頁。

（３）毛沢東「新民主主義論」、『毛沢東選集』（全１巻版）、655－704 頁。

（４）拙稿「中国の“新民主主義社会”再考」（同志社大学『経済学論叢』第 51 巻第１号、1999 年６月）。

（５）拙稿「中国における改革開放の原点」、『東アジア研究』第５号、2001 年。

（６）マルクス『資本論』（長谷部文雄訳）青木書店、1964 年版第１巻。マルクス第１巻への序、71 頁。

（７）拙稿「台湾問題の争点」（筑紫女学園大学『紀要』第 14 号、2002 年）。

（８）拙稿「韓半島の情勢変化と韓日関係」『（韓国）東亜大学校学会誌』2000 年 11 月。

（９）拙稿「マルクスの晩年構想と後進社会主義再考」（韓国語）、韓国全南大学校『地域開発研究』39 巻第１号、2007 年。

（10）中村平八『発展途上社会主義研究』第３章、日本白桃書房、1988 年。

（11）拙稿「現代中国文明の現代的構造を考える―A.J. トインビー文明観との対話」、筑紫女学園大学『論叢』第 11 号、2000 年。

（2010 年５月 16 日　於中国長春）

東アジア学会 20 年

東アジア学会副会長／RKB 毎日放送代表取締役社長　永守 良孝

毎日新聞の外信部勤務を終えて小倉の西部本社に戻ったのが 91 年夏である。学会がスタートして 1 年後くらいであろうか。ソウル特派員を 5 年余、外信部でのデスク勤務 1 年を経て久しぶりに西部本社にもどった私の関心は東アジアだった。当時、東京では依然として主な関心はアメリカであり、次は欧州、であった。とくにソ連崩壊のさなかであり「冷戦の終焉」が声高に語られていた。しかし、分断国家としていまだ冷戦が継続している朝鮮半島から戻った者にとっては「東アジアではそう簡単には戦争と平和の構造は変わらないのでは」という思いが強かった。

西部本社の報道部でデスクという職務についた私は、まず東アジアシリーズの連載を考えた。記者全員の語学能力を調べ、希望を聴き、シリーズに取り組む記者を決めた。台湾を皮切りに中国、フィリピン、韓国に記者を送った。貧乏会社なので「出張は出来高払い」と脅して連載に値するものになれば出張旅費を支払う、などと乱暴なことも言ったりした。何よりもアジアに、特に東アジアに対する関心と興味を若い記者たちに持ってほしかった。東京に行きたがる記者ではだめだ、という気持ちがあったからでもある。世界を視野に入れてほしい、という思いだった。

徹底したルポルタージュ主義をとり、その地域の人々の息吹と生活、そして未来への思いが伝わるようなものにしたつもりである。余談だが、後年、西部本社出身の記者がソウル、北京、香港、バンコク、モスクワ、ニューデリー、イスラマバードそしてワシントン、ニューヨーク、ロサンゼルス、ブリュッセル、ハラレに赴任して活躍したのは、こうした刺激が多少は役に立ったかな、と思っている。

そんな時期に小川先生の知遇を得て学会への入会を誘われた。まったく学術的な人間ではないので「学会」と言われて躊躇したが、特に学者である必要はない、と言われて気が楽になりいれていただいた。それ以来の会員ではあるが、およそ不良会員でなかなか研究会にも出席できず申し訳なく思っている。

92 年だったか学会の関連で小川先生の誘いで木幡先生とともに中国を訪ねた。北京、天津から山東半島の東営市、臨淄などを経て中朝国境の丹東市、万里の長城の新たな東端・虎山、大連などを回ったのだが、いくつか強烈な印象を受けた。

天津から東営に向かう高規格道路（片側 5 車線くらい？）が延々と伸びているのだが、両側はずっと湖である。「なんという湖か」と聞くと相手は笑って「これは雨水がたまったのだ」という。見渡す限りの平坦な土地の真ん中に高規格道路を通すためには盛り土が必要である。しかし、この辺は見たとおりの平坦な土地で山を崩したりして必要な盛り土を確保できない。で、道路となるべき部分の両側をどんどん掘って土を

確保して盛り土にしたのだという。土を掘った後の穴？に雨水がたまって見渡す限りの「湖」ができたと言うのだ。「でも畑の土を掘って盛り土にしたのでは収穫はどうなるのです？」というと相手はまた笑って「もともとこの辺の平原は塩分が強く作物はできないのです」というのである。

思わず呆然としてしまった。韓国の高速道路建設も早かったが、これは軍用地として確保してあった土地を活用したもので、日本のような土地買収の必要が極めて少なかったことによる。中国はそれを上回る超スピードで高規格道路を建設できるわけがわかった。もちろん、いろんなケースがあるだろうから、これだけで判断したわけではないが、すさまじい国だ、という実感がひしひしと迫ってきたのである。あれから20年近い年月で中国は激変を重ねている。何度訪ねても驚く。ソウル五輪のころ、韓国の人々は「ソウルの1年世界の10年」と言って成長と変化の速さを誇ったが、いまや「中国の1年世界の20年」、であろうか。しかしそのスピードの影に見渡す限りの「湖」が見え隠れする。

一方、丹東でも貴重な経験をした。国境の大河・鴨緑江から北朝鮮を見たことである。91年春に私は毎日新聞訪朝団の一員として北朝鮮を訪れ、金日成主席と会見した経験がある。もちろん、見るもの聴くものお膳立てされたものであることはわかるが、予想を超えるものはなく初めての割には印象が薄かった。しかし、鴨緑江の対岸から見る北朝鮮は別種の趣があった。国境は川の真ん中ではなく、どちらの側によってもいい、というので遊覧船で随分北朝鮮側にも寄っていった。ほとんど人影がなく中国側と際立った対照をなしていた。しかし印象に残ったのはそこではない。小川先生のコネで、鴨緑江のやや上流で「国境貿易」の有様を見たのである。通常外国人が立ち入るのは難しいと思える地域である。川の真ん中辺になんともオンボロとしかいいようのない船が浮かび、鈴なりに人が乗っている。北朝鮮の人々である。中国側と物々交換のために船に乗って川の中流まで来るのである。くず鉄などを持ってくるのだと言う。中国側からは衣類などを手に入れるのだとか。ひとびとの声が聞こえるでもなく黙々と「国境貿易」に出てくる北の人々の姿はあの平壌とは別世界であった。今のような飢餓状況が伝えられたわけでもないころであったが北朝鮮の内情がただ事ではないことは肌に伝わってきたのである。

東アジアと言ってももちろんひとくくりにできるわけでもないし、かといって今ここで述べたような個々の姿をたくさん集めても全体像を結ぶわけでもない。しかし、東アジア学会はこの20年間、先生方が全体と部分とを結びつける作業をたゆむことなく続けて、いろんな東アジア像を結ばせる上で大きな役割を果たしたのではないか、と思っている。私自身は何もしていないので何を言う資格もないが、なんとなく驥尾に付してこられたのは嬉しいことだとひそかに思っている。

東アジア学会と私

東アジア学会顧問／福岡県日朝友好協会会長　北原 守

アジアに強い関心を持つようになったのは青年の頃からだった。多様性がありながらも、その基底に共通して流れる統合的(インクルーシブ)な物の考え方、つまりは東洋思想に惹かれたからであろうが、いつかはアジアの時代が来るとの思いは年々深くなっていった。特に、朝鮮半島には「同じモンゴロイドの血が流れている」との思いも重なって、民族の魂に触れる歴史や文化のみならず、政治、経済などにも関心を持った。

「とにかく現場を訪れ、多くの人たちと語り合おう」。その現場第一主義で中国や韓国、さらには東南アジア諸国を訪問し、見聞を広める旅が始まった。特に 1983 年(昭和 58)に福岡県議会議員になってからは、福岡県のアジア戦略とも相まって一年のうちおよそ 100 日はアジアを歩き回っているといった年もあった。

その中で、1965 年の日韓、72 年の日中の国交正常化は「これでアジアが近くなる」と喝采を上げたが、それよりもまして 90 年の韓ソ、92 年の中韓の国交正常化は、北東アジア地域が若い時から思い描いていた一日行動圏になったとして小躍りしたことを今でも覚えている。福岡からソウルへ、ソウルから上海へ、そして上海から福岡へと飛行機を乗り継いでの旅は感慨の深いものがあった。

それから 5 年、中国・南京でのことだった。福岡県日中友好議員連盟の幹部連中が集まって鳩首協議した。「北東アジアの平和と繁栄は北朝鮮抜きにはあり得ない、朝鮮問題をやろうじゃないか」。翌 96 年、福岡県議会初の訪朝団が超党派でピョンヤンを訪れた。

実はこの時、迎えくれた朝日友好親善協会の宋浩京会長(故人)に訪問団は啖呵を切った。「われわれ貴国を訪問したが、決して北のシンパではない、どちらかといえば親韓派が多い、それでもいいのですね」と。会長の答えは明快だった。「北も南も平等に見る人が来てくれることを歓迎する」。以来、同協会との 14 年の付き合いが続いている。

北朝鮮との付き合いの中でいくつか学んだものがある。歴史を学ぶこと、信義を重んじること、県民の目線で付き合うこと等々の大切さを。たとえば歴史。朝鮮民族が 5000 年とされている歴史の中で自主独立の国家を形成したのは高句麗と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)であり、他のほとんどの時代は中国の冊封体制か日本の植民地支配下にあった。この経験から民族を守るためには力を持つことが何よりも優先され、それは現今の対米戦略にみる核保有への道にも通じているのでないか。核保有はいかなる国であれ、容認できないものの、その背景にあるものを理解し、真摯に論じ合う

ことで信頼関係は確実に築かれる。北風よりも太陽を―、彼の国との付き合いで得た教訓の一つだ。

この 5 月、中朝首脳会議が開催された直後に訪朝した。受け入れ機関の朝日友好親善協会の金成男会長はこういった。「経済をはじめ広範な問題を両国で共有し、完全な見解の一致を見た。中朝の歴史的な一大事変だ」と。彼は首脳会談の通訳だった人物だが、その表情には自信が見て取れた。激動の 2010 年、アジアは中国を中心に確実に動いていくであろう、それを実感した訪朝でもあった。

東アジア学会に加入して 10 年が過ぎた。そこで得た東アジア情勢への知見は今日の活動の血肉となっている。今後も一会員として研鑽に努め、会の発展に尽くしたい。

小川先生との出会いが学会とのかかわりの始まり

朝日新聞社監査役付　有田 茂

私と東アジア学会のかかわりは、西南学院大学の小川雄平先生との出会いに始まる。初めて小川先生に会ったのは、1989 年（昭和六四年）の２月２日ではないかと思う。

お会いするきっかけになったのは、当時、私が所属していた朝日新聞西部本社経済部で 89 年１月から連載を始めた「黄海経済交流圏」だ。連載のねらいは、1988 年９月、ソウルでオリンピックが開催された前後から、韓国と中国の交流が急速に盛んになり、これに九州・山口を加えた３地域での経済交流をルポしようというものだった。上司から、「君が担当だ」と言われ、89 年 10 月からまずは日本国内の取材にとりかかったが、正直言って知識が乏しく、「黄海経済圏」「東アジア経済圏」という言葉さえよく知らず、困ったなあ、というのが正直な気持ちだった。

日本国内での取材と韓国、中国での取材準備を平行して進めた。そのときはまだ、小川先生がいち早く日本・中国・韓国に加えて北朝鮮の経済交流の研究に取り組んでいたことを知らなかった。知っていたら、１月の連載に登場してもらっただろうし、助言をいただけただろうと、と今でも悔やんでいる。

西南大学の研究室を訪ねた時の印象は、細身で、前髪を今よりは前に垂らしていたように思う。「環黄海経済圏」「東アジア経済圏」について、具体的な事例を交えての話はとても生々しかった。89 年３月に連載した連載「黄海経済交流圏」の第２部の２回目「中・韓接近の仲介役に北九州名乗り」に、小川先生が北京と上海で見聞きした中国と韓国の経済交流の話や、先生の提唱する「環黄海経済圏」を盛り込んで話を展開した。私は西南大学の卒業生（1974 年）であり、卒業後初めて訪ねた大学の研究室は懐かしかった。

96 年７月には、東アジア学会の一員として、鴨緑江を挟んで北朝鮮と国境を接する中国の丹東市を訪ねた。岸辺に佇む北朝鮮の人々の無表情な顔を今でも思い出す。

東京での記者活動、その後福岡に２度、管理職として勤務、などの理由から、少しずつ「黄海経済交流圏」への関心が遠のいていった。取材の現場を完全に離れたつもりはないが、記者のようにはいかなかった。このことは心残りのひとつになっている。

東アジア学会が設立されて 20 年。日刊工業新聞を経て朝日新聞に入って 23 年になり、今年 11 月に定年を迎えることに、時の因縁を感じる。定年後もふるさとの北九州市に帰る予定は今のところありません。学会へはこれまでも名ばかりで申し訳なく、これからも地理的な距離を感じざるをえないが、ずっとメンバーの一員ではいたい。

林一信さんを偲んで

東アジア学会名誉会員　櫻井 浩

林一信さんは昨 2009 年 9 月 15 日に亡くなりました。私がそのことを知ったのは一カ月余りも過ぎてからのことでした。ご遺族の「そっとしておいてほしい」というご希望があったと聞いています。私が最後に林さんにお会いしたのは 2008 年 4 月 26 日、西南学院大学で東アジア学会の理事会及び研究会が開催された日でした。2005 年にはいくつかの病気が重なり、長い間入院されていたと、これも後になって聞きましたが、2008 年 4 月には元通りお元気そうで、会終了後はいつものように二次会にも参加されていましたので、亡くなられたと聞き大変驚きました。

林一信さんに、私が最初に会ったのは 1961 年 4 月、アジア経済研究所に入った時でした。林さんは国立国会図書館からアジア経済研究所に移ってこられた方で、総務部主任をされていて、私は同じ総務部で仕事を始めましたが、1 年後に他の部に配置換えになったので、しばらく接する機会が少なくなっていました。しかし、1970 年代中ごろ林さんが韓国の調査研究に携わるようになり、対象分野が同じになったことから、接する機会が多くなりました。と云っても林さんはどんどん上に登ってゆき、最後は研究所の理事になられたのに対し、私はいつまでも同じあたりに留まっていたのが実態でした。

私は縁あって、1989 年 4 月久留米大学に転職しましたが、林一信さんも間もなく九州国際大学に転職されたのでした。その頃始めて聞いたのですが、幼いころ福岡市天神の近くに何年か住んでいたことがあるとのことでした。さらに同じ東アジア学会に所属し、1994 年ころからと思いますが、同学会の理事会でお会いするようになりました。以来、東アジア学会の研究会、大会、理事会などで年に何遍か同席するようになりました。東アジア学会の研究会や理事会は西南学院大学で開催されることが多く、北九州市に住んでおられた林さんにはかなり遠距離でしたが、ほとんどどの会にも欠席されることがなく、長い間東アジア学会の発展に寄与されたのでした。そして、亡くなられる半年前まで理事を務められました。

林一信さんは自分のことでは人を煩わせないようにと人一倍気を使う半面、他人の病気や不幸には大変気を配り、同僚や部下、友人が入院などするとすぐ見舞いに駆けつけるという気配りの人でした。

これは私の勝手な考えですが、恐らく林さんは墓の中に眠っていないと思います。「千の風」になって大空を駆け巡っているのではないでしょうか。雨になり、光になり、星になり大宇宙を旅していることと思います。そして私もそのようになりたいと思っています。そうなれば、いつか大宇宙のどこかでお会いする機会があるかも知れ

ません。

その時まで、林さんさようなら。　（2010 年 7 月 12 日）

東アジア学会 20 年の活動記録

【1991 年】

◆　東アジア学会第 1 回記念大会
日時：1991 年 8 月 30 日～31 日
場所：西南学院大学
講演
「アジアから見た日本―アジア人女性労働者問題に寄せて」
　レナト・コンスタンチーノ（フィリピン国立大学特別講師、コラムニスト）
　講師紹介「『第二の侵略』とﾚﾅﾄ･ｺﾝｽﾀﾝﾁｰﾉ」：渡部　恒夫（鹿児島経済大学経済学部）
シンポジウム
（1）「アジア人女性労働者と私たち」
　司　　会：三隅　佳子（北九州市市民局女性行政推進部）
　ｼﾝﾎﾟｼﾞｽﾄ：田村　慶子（下関市立大学経済学部）
　　篠崎　正美（アジア女性交流・研究フォーラム）
　　菊川千賀子（福岡市議会議員、アジアと女たちの会）
　　長谷川伸子（九州大学大学院経済学研究科）
（2）「東アジアの地域交流（1）－伽倻と倭」（東アジア考古学懇話会）
　司　　会：高倉　洋彰（西南学院大学文学部）
　ｼﾝﾎﾟｼﾞｽﾄ：柳田　康雄（福岡県教育委員会）
　　申　　敬澈（韓国慶星大学校文科大学）
　　甲元　真之（熊本大学文学部）
　　朱　　甫暾（韓国慶北大学校人文大学）
（3）「東アジアの地域交流（2）－現状と展望」
　司　　会：小川　雄平（西南学院大学商学部）
　ｼﾝﾎﾟｼﾞｽﾄ：金　　鳳徳（中国東北財経大学経済研究所）
　　徳島　千穎（徳水株式会社）
　　朴　　成吉（株式会社三興）
　　吉村　慶元（コーヤク株式会社）
自由論題研究報告
分科会（１）座長：吾郷　健二（西南学院大学経済学部）
　１.「地域の活性化戦略としての国際化『ピース連合』」
　　高橋　正博（日本開発銀行設備投資研究所）
　２.「衛星で見る東アジアの自然と産業活動」
　　緒方　純俊（九州工業大学）・安部　桂司（工業技術院科学技術研究所）
分科会（２）座長：中尾　英俊（西南学院大学法学部）
　１.「韓国の家族の今日的変化」
　　篠崎　正美（アジア女性交流・研究フォーラム）
　２.「中国における運輸行政機構の改革について」
　　香川　正俊（熊本商科大学商学部）
分科会（３）（東南アジア研究会）座長：権藤與志夫（九州大学教育学部）
　１.「東南アジアと英語」
　　井伊　奠　（鹿児島短期大学教養学科）
　２.「シンガポール・中国関係の 25 年」
　　田村　慶子（下関市立大学経済学部）

３.「世界システムの中のアジア」
藪野　祐三（北九州大学法学部）
分科会（４）（国際経済学会九州山口地区研究会）座長：名畑　恒（山口大学経済学部）
１.「中東の経済格差とアラブの分裂」
伊藤　治夫（西南学院大学経済学部）
２.「1980 年代の韓国経済の展開」
尹　　明憲（国際東アジア研究センター・北九州大学産業社会研究所）
３.「両岸経済交流の進展」
王　　効平（国際東アジア研究センター）

◆　第 1 回研究会（定例研究会）
日時：1991 年 11 月 16 日
場所：(財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
報告：
「中国と朝鮮戦争」
喜田昭治郎（九州国際大学）
「輸出加工区の新展開と発展途上国の工業化」
石上悦郎（福岡大学）

◆　第 2 回研究会（定例研究会）
日時：1991 年 12 月 21 日
場所：西南学院大学
報告：
「中国東北地方と日本企業を巡る最近の動き」
立石揚志（九州新アジアセンター代表）
「貿易経済圏と分業経済圏」
工藤憲男（経営教育研究所所長）

【1992 年】

◆　第 3 回研究会（定例研究会）
日時：1992 年 1 月 18 日
場所：(財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
報告：「東北アジア経済開発構想と中国吉林省」
劉　中樹（吉林大学副学長、東北アジア研究センター理事長）

◆　第 1 回日韓合同研究会
日時：1992 年 2 月 22 日～23 日
場所：韓国釜山市
テーマ：□東アジア経済と地域交流□
「東アジア経済圏と環黄海経済圏」
工藤　憲男（経営教育研究所所長）
「Newly Industrializing Areas in the Asian Pacific Economic Cooperation」
李　熙亨（カリフォルニア州立大学教授、中国延辺大学客員教授）
「地域間経済交流と環黄海・環日本海経済圏」
小川　雄平（西南学院大学教授）

「釜山広域経済圏と地域間協力方向」
朴　仁鎬（釜山発展 System 研究所教授、京都大学客員教授）

◆　第 4 回研究会（定例研究会）
日時：1992 年 2 月 29 日
場所：(財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
報告：「東アジアダイナミズムの新しい発見」
李　熙亨（カリフォルニア州立大学教授、中国延辺大学客員教授）

◆　第 5 回研究会（定例研究会）
日時：1992 年 4 月 25 日
場所：西南学院大学
報告：「中国農業の現状況」
村岡　伸秋（西南学院大学経済学部教授）

◆　第 6 回研究会（定例研究会）
日時：1992 年 5 月 16 日
場所：(財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
報告：「韓国の社会保障制度と財政」
兪　和（(財）国際東アジア研究センター専任研究員）

◆　第 7 回研究会（定例研究会）
日時：1992 年 6 月 20 日
場所：西南学院大学
報告：「華南経済圏と対中投資」
王　効平（北九州大学商学部講師）

◆　第 2 回東アジア共同研究会北九州セミナー
「東アジアにおける政治経済文化の接合の可能性」
日時：1992 年 7 月 3(金)〜5 日(日)
場所：㈶北九州市国際東アジア研究センター・セミナールーム
研究報告会□　座長：木下　悦二（九州大学名誉教授）
１．「日韓の家族意識の比較調査」
篠崎　正美（アジア女性交流・研究フォーラム主席研究員）
２．「東アジアにおける儒教的資本主義の精神」
金　日坤（釜山大学経済学科教授）
研究報告会□　座長：朴　仁鎬（釜山発展システム研究所教授）
３．「東北アジア経済圏形成の浮上と釜山ー福岡両地域の位相と役割」
成　炳卓（東義大学経済学科教授）
４．「衛星リモートセンシングによる北東アジアの経済開発の可能性調査」
緒方　純俊（九州工業大学情報工学部教授）
５．「新世界秩序と韓日関係」
愼　奎晟（東亜大学経済学科教授）
全体討論　座長：林　一信（九州国際大学教授）・金　日坤（釜山大学経済学科教授）

◆　第 8 回研究会（定例研究会）
日時：1992 年 7 月 18 日

場所：(財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
報告：「韓国農業の国際化―日本との比較」
　　鄭　英一（東京大学経済学部教授）

◆　東アジア学会第 2 回記念大会
日時：1992 年 8 月 29 日～30 日
場所：毎日西部会館 5F 中ホール（北九州市）
国際シンポジウム「変貌するアジア」
　基調講演「北東アジアにおける変貌」
　　李　弘杓　世宗研究所研究員　他
　シンポジウム「アジアにおける WID」
　　萱島　信子　国際協力事業団社会開発協力部社会 1 課　他
　研究報告
　「市場経済への『軟着陸』―中国広東省の事例研究―」
　　杜　進（(財）国際東アジア研究センター主任研究員）
　「Maastricht Treaty and its Implications for the Asian-Pacific Region」
　　Ali M. El-Agraa（福岡大学商学部教授）
　「興南再開発構想」
　　緒方純俊（九州工業大学情報工学部教授）
　　安部桂司（工業技術院科学技術研究所主任研究員）
　「アジア財閥企業の多国籍化」
　　王　効平（北九州大学商学部講師）
　「技術移転と資本論理」
　　工藤憲男（(株）経営教育研究所代表取締役所長）

◆　第 9 回研究会（定例研究会）
日時：1992 年 10 月 17 日
場所：(財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
報告：「図們江開発の可能性」
　　小川　雄平（西南学院大学商学部教授・(財）国際東アジア研究センター嘱託研究員）
　　木幡　伸二（(財）国際東アジア研究センター専任研究員）
　　兪　　和（(財）国際東アジア研究センター専任研究員）

◆　第 10 回研究会（定例研究会）
日時：1992 年 11 月 21 日
場所：(財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
報告１．「海峡経済圏構想について」
　　勝原　健（(財）国際東アジア研究センター副所長）
報告２．「北朝鮮における自由経済貿易地帯の設置と関連法規の整備について」
　　兪　和（(財）国際東アジア研究センター専任研究員）

◆　第 11 回研究会（定例研究会）
日時：1992 年 12 月 19 日
場所：(財）アジア太平洋センター会議室
報告：「東アジア経済圏に与えるロシアのインパクト―ロシア極東での経済交流の現実―」
　　鈴木　啓介（九州大学経済学部教授）

【1993 年】

◆ 第 12 回研究会（定例研究会）
日時：1993 年 1 月 30 日
場所：（財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
報告：「ロシア極東の困難と展望―環日本海地域における経済交流の可能性」
E.B.コブリギン（西南学院大学教授）

◆ 第 3 回日韓合同研究会
日時：1993 年 2 月 19 日～20 日
場所：コモドホテル会議場 2F（韓国釜山）
□東北アジア経済圏の新しい流れと協力課題□
報告１．「中国の“二つの加速化”と東北アジア経済協力」
金　鳳徳（北九州大学産業社会研究所客員助教授・東北財経大学経済研究所副教授）
報告２．「東北アジア経済圏の可能性と課題―朝鮮の動きを中心に」
小川　雄平（西南学院大学商学部教授）
兪　和（（財）国際東アジア研究センター専任研究員）
報告３．「東アジア経済協力構想と展望」
金　守一（釜山外国語大学教授）
報告４．「環黄海経済圏と中枢都市」
工藤　憲男（経営教育センター所長）
報告５．「日中韓経済交流の展望」
杜　進（（財）国際東アジア研究センター主任研究員）
報告６．「東北アジア経済圏形成と釜山の役割」
朴　仁鎬（釜山発展システム研究所研究委員）

◆ 第 13 回研究会（定例研究会）
日時：1993 年 4 月 17 日
場所：　西南学院大学
報告：「内陸視点からみた華南経済―広東省を視察して」
上野　登（九州共立大学教授）

◆ 第 14 回研究会（定例研究会）
日時：1993 年 6 月 19 日
場所：（財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
報告：「韓国の東アジア外交の現状と展望―中国、北朝鮮を中心にして―」
金　龍瑞（九州大学法学部客員教授・韓国梨花女子大学校行政学科教授）

◆ 東アジア学会第 3 回記念大会
日時：1993 年 7 月 31 日
場所：久留米大学
国際シンポジウム□東アジアにおける地域経済圏の諸相□
パネリスト
李　甲鉄（韓国　釜山大学）
李　太雨（韓国　韓国海洋大学）
陳　建平（中国　山東大学）

恩田　久雄（日本　敦賀女子短期大学）
木下　悦二（日本　久留米大学）
自由論題研究報告
分科会（１）
座長　櫻井　浩（久留米大学商学部）
１.「韓国農村の家族問題」
篠崎　正美（アジア女性交流・研究フォーラム）
２.「東北アジア局地経済協力と豆満江経済圏構想」
朴　桂應（韓国圓光大学アジア経済研究所）
分科会（２）
座長　利光　正文（別府大学文学部）
１.「東南アジアの民主化についてーミャンマーを中心にー」
伊藤　憲治（北九州大学法学部）
２.「東北アジアの開発政治ーシンガポールを中心にー」
田村　慶子（下関市立大学経済学部）
分科会（３）
座長　石上　悦朗（福岡大学商学部）・駄田井　正（久留米大学商学部）
１.「経済開発における市場メカニズムと政策介入ー新古典派開発論とその問題点」
山本　一哉（九州大学大学院）
２.「１９世紀末の米国の内国為替制度」
川合　研（福岡大学商学部）

◆　第 15 回研究会（定例研究会）ー民族統一研究院（韓国）東アジア学会合同研究会
日時：1993 年 10 月 30 日
場所：(財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
「社会主義圏の改革と北韓体制の変化との比較」
開会挨拶：木下悦二（東アジア学会会長・久留米大学教授）
特別講演：「社会主義圏の崩壊と南北韓関係」
李　秉龍（民族統一研究院院長）
座長：林　一信（九州国際大学教授）
午前の部
報告１.「社会主義圏の改革と北韓体制の変化との比較」
徐　載鎮（民族統一研究院北韓研究室長）
２.「北韓の伝統文化と改革・開放との関係」
李　宇栄（北韓研究室責任研究員）
３.「北韓の改革・開放の現況と展望」
金　聖哲（北韓研究室責任研究員）
午後の部
報告１.「朝鮮の社会・政治状況を見聞して」
前田　康博（北九州大学教授
２.「朝鮮経済と豆満江開発」
小川　雄平（西南学院大学教授）
討論　菅　英輝（北九州大学教授）
森　善宣（久留米大学講師）
永守　良孝（毎日新聞山口支局長）
櫻井　浩（久留米大学教授）

【1994 年】

◆ 第 16 回研究会（定例研究会）
日時：1994 年 3 月 5 日
場所：（財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
報告：「北東アジアの開発と日本の協力―図們江流域開発構想によせて―」
　　石尾喜代子（日中東北開発協会広報部長）

◆ 第 17 回研究会（定例研究会）
日時：1994 年 5 月 28 日
場所：（財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
報告：「下関市の朝鮮人・韓国人―下関市定住外国人の実態調査から―」
　　田村慶子（下関市立大学経済学部助教授）

◆ 東アジア学会第 4 回記念大会（日中韓合同大会）
日時：1994 年 7 月 25 日～26 日
場所：中国天津市先達大酒店
□東アジア経済発展と環黄渤海地域経済協力国際研討会□
司　会　羅遠鵬（中共天津市常任委員、市委員会宣伝部部長）
開会挨拶
張立昌（天津市市長）
母国光（南開大学校長）
木下悦二（日本東アジア学会会長）
姜泳琇（韓国東アジア学会会長）
自由論題研究報告
司　会　小川雄平（西南学院大学商学部教授）
（1）「東北アジア経済の形成と環黄海経済協力」
　　金　昌洙（釜山大学校商科大学教授）
（2）「東北アジアにおける地域開発の課題」
　　王　効平（北九州大学経済学部助教授）
（3）「日本の対中国直接投資」
　　原口　俊道（鹿児島経済大学経済学部教授）
（4）「環勃海地域における京津経済圏の地位と役割」
　　陳　鉞（南開大学国際経済系主任・教授）
司　会　姜泳琇　（韓国釜山発展研究院院長）
（1）「天津及び東北アジアの経済合作」
　　呉　敬華（天津市経済社会発展研究中心主任、研究員）
（2）「韓国、中国海上航路の開拓」
　　李　大雨（韓国海洋大学校社会科学大学教授）
（3）「黄吉海地域経済合作の発展方策」
　　皮　黔生（天津経済技術開発区管理委員会常務副主任、総公司総経理）
共通論題研討会
□東アジア地区経済の発展の趨勢及びその地域協力・強化の戦略□
討論者　小川　雄平（西南学院大学商学部教授）
　　櫻井　　浩（久留米大学経済学部教授）　　他
□環黄渤海地域の国際経済協力の目標、方法及戦略□

討論者　小川　雄平
　　櫻井　　浩　他

◆　第 18 回研究会（定例研究会）
日時：1994 年 11 月 19 日
場所：(財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
報告１.「中国の金融改革」
　　唐　若霓（駐日本中国大使館経済商務参事官）
報告２.「中国の交通運輸」
　　許　梅（(株）サンキュウリサーチ＆クリエート調査グループ研究員）

◆　第 19 回定例研究会「東アジア学会（日本）・民族統一研究院（韓国）合同研究会」
日時：1994 年 12 月 3 日
場所：(財）国際東アジア研究センター・セミナールーム
□北朝鮮の体制変化と韓半島の統一□
開会挨拶　木下　悦二（東アジア学会会長・久留米大学経済学部長）
基調講演　「東北アジア情勢と韓半島統一」
　　崔　宜喆（民族統一研究院副院長）
午前の部
座長　　林　一信（九州国際大学国際商学部教授）
報告「北朝鮮社会の動向」
　　徐　載鎮（民族統一研究院北韓研究室長）
　「北朝鮮の対外政策と対南政策」
　　鄭　圭燮（民族統一研究院北韓研究室研究員）
午後の部
座長　　林　一信（九州国際大学国際商学部教授）
報告「北朝鮮の対外経済開放と国境貿易」
　　小川　雄平（西南学院大学商学部教授）
　「北朝鮮の対外経済開放政策」
　　崔　寿永（民族統一研究院北韓研究室責任研究員）
予定討論
討論者　櫻井　浩（久留米大学経済学部教授）
　　永守　良孝（毎日新聞福岡総局長）
　　菅　　英輝（九州大学比較社会文化研究科教授）
　　李　　教悳（民族統一研究院北韓研究室責任研究員）
　　金　　東煥（民族統一研究院理事）
合同討論
通訳　　金　　鳳珍（北九州大学外国語学部助教授）
　　文　　大宇（国際東アジア研究センター専任研究員）
司会　　小澤　興大（国際東アジア研究センター事務局次長）

【1995 年】

□東アジア学会創立 5 周年記念大会
日時：1995 年 7 月 23 日
場所：(財）国際東アジア研究センター　会議室

「ポスト冷戦とアジアの局地的経済圏」
午前の部　国際シンポジウム「朝鮮半島情勢と環黄海・環日本海経済圏の行方」
来賓祝辞：姜　泳王秀（韓国東アジア学会会長・釜山発展研究院院長）
コーディネーター：林　一信（九州国際大学国際商学部教授）
基調講演：「ポスト冷戦と東アジアの局地的経済圏」
　　木下　悦二（東アジア学会会長・久留米大学経済学部教授）
午前の部
国際シンポジウム「朝鮮半島情勢と環黄海・環日本海経済圏の行方」
座　長：櫻井　浩（久留米大学経済学部教授）
報告者：小川　雄平（西南学院大学商学部教授）
　　安　仁海（韓国民族統一研究院責任研究院）
討論者：森　善宣（鹿児島県立短期大学講師）
　　永守　良孝（毎日新聞福岡総局長）
　　安　振利（中国丹東市人民政府研究室主任）
午後の部
国際シンポジウム「ポスト鄧小平と華人経済圏の行方」
座　長：勝原　健（国際東アジア研究センター副所長）
報告者：王　効平（北九州大学経済学部助教授）
游　仲勲（亜細亜大学国際関係学部教授）
討論者：座間　紘一（山口大学経済学部教授）
　　金　鳳徳（中国東北財経大学経済研究所長）
　　平田　昌弘（九州国際大学国際商学部教授）

◆　第 20 回定例研究会
日時：1995 年 8 月 18 日（金）
場所：博多城山ホテル
テーマ：「ベトナムの経済は、今　ーハノイ市の投資環境を中心にー」
講　師：ラ・ヴァン・ヴィエン（ハノイ市対外経済関係局長）
参加者：約 30 名

◆　第 4 回合同研究会・日韓東アジア学会合同研究会（東アジア海洋港湾都市国際フォーラム）
日時：1995 年 10 月 27 日（金）
場所：釜山市パラダイス・ビーチホテル
主催：韓国東アジア学会・日本東アジア学会・釜山発展研究院
協賛：国際交流基金
後援：釜山廣域市・在釜山日本国総領事館・中国総領事館・ロシア領事館
参加人員：150 名
「21C 東アジア海洋港湾都市間における新たな創造的協力秩序と発展的な方向模索」
開会式
開会辞　姜　泳琇（韓国東アジア学会長）
歓迎辞　文　正秀（釜山廣域市長）
祝辞　木下　悦二（日本東アジア学会長）
基調講演
　「東アジアにおける経済発展の推移と展望」
　　金　日坤（釜山大学　教授）
　「東アジアにおける海洋経済圏の可能性と展望」
　　渡辺　利夫（東京工業大学教授）

第 1 部－分科会－
【第 1 分科会：都市経営・協力分野】
司会者：崔　相哲（ソウル大学教授）
主題発表
「大都市の経営と管理」
宮本　憲一（立命館大学　教授）
「中国経済の市場化と都市経営の課題」
杜　進（上海化東理工大学客員教授（ICSEAD　主任研究員））
討論者
朴　仁鎬（韓国東アジア学会幹事）
John　Wong（シンガポール国立大学東アジア政治経済研究所長）
坂口　光一（九州経済調査協会調査研究部次長）
【第 2 分科会：海運港湾分野】
司会者：李哲榮（韓国海洋大学教授）
主題発表
「21C 港湾都市の未来像」
ウラジオストック大学　教授
「海運港湾都市の発展的方向」
朴　彰鎬（釜山発展研究院先任研究員）
討論者
金　炯男（釜山地方海運港湾　港湾課長）
小川　雄平（西南学院大学教授（日本東アジア学会幹事））
朴　明燮（釜山水産大学　教授）
第 2 部－各分科会　報告・総合討論－
各分科会　報告
総合討論・総整理
「21C 海洋港湾都市間における協力秩序とその発展的な方向」
【COORDINATOR】
趙　正済（韓国海運産業研究院長）
【PANELIST】
朴　仁鎬（韓国東アジア学会幹事）
小川　雄平（日本東アジア学会幹事）
杜　進（上海華東理工大学客員教授）
John　Wong（シンガポール国立大学　東アジア政治経済研究所長）
ウラジオストック大学教授
第 3 部－釜山廣域市長主催 RECEPTION－
東アジア海洋港湾都市の交流の場
・釜山廣域市長挨拶
・来賓紹介
・乾杯（日本国総領事　祝辞）

【1996 年】

□日韓「東アジア学会」合同研究会
日時：1996 年 2 月 25 日
場所：嬉野温泉「和多屋別荘」タワー館 1 階・くじゃくの間

「日韓海峡経済圏と地方発展」
午前の部「自由論題研究報告」
座長：小川　雄平（西南学院大学商学部教授）
報告１.「経済発展と景気変動の指標」
工藤　憲男（西日本経済研究所長）
報告２.「大交流時代下の FAZ の現況」
上野　登（九州共立大学教授）
特別報告「北部九州心港湾建築構想」
岩瀧　清治（運輸省第四港建設局地域整備調整官）
午後の部「共通論題研究報告」
座長：金　日坤（釜山発展研究院長）・林　一信（九州国際大学国際商学部教授）
報告１.「東アジアの局地的経済圏と韓日海峡経済圏」
朴　仁鎬（韓国東アジア学会幹事）
報告２.「アジアのクルーズ・フェリー市場－韓日海峡経済圏を中心として」
李　大雨（韓国海洋大学教授）
報告３.「西九州海洋クラスター都市構想」
小倉　理一（㈱西日本流体技研代表取締役社長・長崎大学客員教授）
予定討論
討論者：坂口　光一（九州経済調査協会調査研究部次長）
小川　雄平（西南学院大学商学部教授）
駄田井　正（久留米大学経済学部教授）
李　甲銖（釜山大学教授）
李　仁根（浦項専門大学教授）

◆　第 21 回研究会（定例研究会）
日時：1996 年 4 月 27 日（土）
場所：(財）国際東アジア研究センター会議室
報告１.「中国東北地域の対日経済交流」
高木　直人（九州経済調査協会主任研究員）
報告２.「東南アジアにおける農業の機械化とマーケティング」
坂井　純（九州大学名誉教授）

□東アジア学会第 6 回大会
日時：1996 年 8 月 2 日（金）
場所：中国瀋陽市「友園賓館」
午前の部：自由課題研究報告
座長：秦　鴻祥（遼寧亜洲太平洋研究所所長）
報告１.「遼寧省の外資受入施策(1996～2000)」
方　継蒼（遼寧省対外貿易経済合作所副所長）
報告２.「東北アジア都市協力隊の必要性と釜山の役割」
朴　仁鎬（釜山発展研究院研究委員）
報告３.「運命共同体と共有資産・・・国家の重層構造」
工藤　憲男（西日本経済研究所所長）
午後の部：共通論題討論会
座長：小川　雄平（西南学院大学商学部教授）
問題提起
１．投資受入国の立場から　馮　貴盛（遼寧社会科学院経済研究所研究員）

２．都市間協力の提起　　張　炳翼（蔚山大学校社会科学大学教授）
３．企業家の立場から　　吉村　慶元（キョーエイ薬品(株)会長）
予定討論
１．有田　茂（朝日新聞西部本社経済部次長）
２．黄　圭善（釜山大学校経済大学教授）
３．金　鳳徳（東北財経大学経済研究所長）
４．河　熊守（釜山大学校経営大学教授）
５．立石　揚志（アジアビジネスセンター常務取締役）
６．李　有春（遼寧亜洲太平洋研究所研究員）
全体討論

◆ 第 22 回研究会（定例研究会）
日時：1996 年 12 月 14 日（土）
場所：(財）国際東アジア研究センター　会議室
報告：「海洋新時代における海洋法の基本構造の変化とオーシャン･ガバナンス」
　　布施　勉（横浜市立大学教授）

【1997 年】

□日韓東アジア学会第 6 回合同研究会
時期：1997 年 2 月 23 日（日）
場所：伊万里グランドホテル
「東アジアにおける都市間連携と地方都市」
開会の辞
挨拶　日本東アジア学会長　木下悦二（久留米大学経済学部長）
　　韓国東アジア学会長　金　日坤（釜山発展研究院長）
祝辞　佐賀県伊万里市長　川本　明
午前の部
座長　小川　雄平（西南学院大学商学部教授）
特別報告「住民主導型の地域連携」
　　小倉　理一（(株）西日本流体技研代表取締役社長）
自由論題研究報告
報告１．「フライングギース・ノーリターン―雁行型経済の終焉―」
　　石田　憲作（北九州市建築局往還境整備室）
報告２．「山東省経済共同研究の経緯―郷鎮企業の山東モデル仮説について」
　　上野　登（九州共立大学教授）
報告３．「環境に優しい持続可能な都市の確立をめざして」
　　岩村　淳一（近畿大学教授）
午後の部
座長　櫻井　浩（久留米大学経済学部教授）
共通論題研究報告
報告１．「パートナーシップとネットワーキングを通じた地域の産業政策」
　　尹　英得（釜山大学校商科大学教授）
報告２．「釜山・福岡・北九州関門３市の役割分担」
　　工藤　憲男(西日本経済研究所長)
報告３．「北東アジアにおける都市サミットの連携と協議体の構成」

朴　明欽（釜山発展研究院研究企画室長）
全体討論

◆　第 23 回研究会（定例研究会）
時期：1997 年 7 月 26 日
場所：西南学院大学学術研究所
【自由論題研究報告】
「日本企業の海外金融子会社による資金調達の効率性」
王　忠毅（西南学院大学商学部　専任講師）
「東アジアの物流と韓国港湾－釜山･光陽港を中心に－」
尹　明憲（北九州大学産業社会研究所　助教授）
【特別報告】
「北東アジアの地域間交流と地方自治体の役割」
富野　暉一郎（島根大学法学部　教授）

◆　第 24 回研究会（定例研究会）
時期：1997 年 9 月 27 日
場所：西南学院大学 2 号館
【特別報告】
「自由経済貿易地帯の投資環境」
孟　鉄虎（朝鮮民主主義人民共和国対外経済協力推進委員会　課長）
金　成俊（朝鮮民主主義人民共和国対外経済協力推進委員会　課長）
【シンポジウム】
座長：奥山　忠政（紀全女子専門大学　講師）
報告
「ソウルから見えた北朝鮮」
筒井　博人（西日本新聞社編集局整理部　次長）
「国境貿易から見た朝鮮経済」
小川　雄平（西南学院大学商学部　教授）
「この目で見た朝鮮－平壌と農村部を訪れて」
北原　守（福岡県議会　議会）
予定討論
櫻井　浩（久留米大学経済学部　教授）
林　一信（九州国際大学国際商学部　教授）
全体討論

◆　東アジア学会第 7 回大会（久留米大学で開催の「第 2 回社会経済国際シンポジウム」を共催）
日時：1997 年 11 月 2 日(日)～3 日（月）
場所：久留米大学　御井学舎
「東アジア地域における社会経済の発展とポスト工業社会」
報告１.「アジアエネルギーバンク」
工藤　憲男（西日本経済研究所長）
２.「首都総公司に見た環黄海地域の産業･企業間協力」
河村　誠治（国際東アジア研究センター主任研究員）

◆　日韓東アジア学会合同研究会〈韓国側当番〉
時期：1997 年 11 月 21 日～22 日

場所：韓国・釜山郊外の梁山通度寺ホテル
「韓日海峡圏の新たな投資環境の政策と技術協力の促進方策」

【1998 年】

◆ 第 25 回定例研究会（韓国民族統一研究院との合同研究会）
時期：1998 年 1 月 24 日
場所：（財）国際東アジア研究センター会議室
「金正日総書記就任と金大中大統領当選以後の南北関係の展望」
【基調講演】
丁　世鉉（民族統一研究院　院長）
【研究報告】
「最近の北韓体系の部門別動向と展望」
金　聖哲（民族統一研究院　研究委員）
「金正日政権の対外及び対外政策の展望」
許　文寧（民族統一研究院　研究委員）
「北朝鮮の食糧問題－１つの死角－」
櫻井　浩（久留米大学経済学部　教授）
【予定討論】
祝部　幹雄（毎日新聞社福岡総局記者）
筒井　博人（西日本新聞社整理部次長）
小川　雄平（西南学院大学商学部長）
【全体討論】

□　日韓東アジア学会合同研究会〈日本側当番〉
時期：1998 年 3 月 7 日
場所：韓国・釜山発展研究院国際会議場
□IMF 体制下の東アジア経済危機と地域間協力□
【基調講演】
「東アジアの通貨危機と経済展望」
木下　悦二（日本東アジア学会会長）
金　日坤（韓国東アジア学会会長）
【研究報告】座長（日本）：林　一信（九州国際大学国際商学部教授）
（韓国）：朴　仁稿（釜山発展研究員研究委員）
報告
「東アジアの金融危機と対応方向」
李　甲銖（釜山大学教授）
「IMF 経済管理とアジア的価値観」
奥山　忠政（紀全女子専門大学講師）
事例報告
「タイの通貨危機とタイ経済の構造的問題」
安　鍾亮（釜山外国語大学教授）
「インドネシア通貨危機の政治経済的考察」
金　守一（釜山外国語大学教授）
【予定討論】
〈日本側〉小川　雄平（西南学院大学商学部教授）

駄田井　正（久留米大学経済学部教授）
〈韓国側〉金　昌洙（釜山大学教授）
高　鍾煥（釜應大学教授）
嚢　眞永（仁済大学教授）
【全体討論】
参加者　日本側：木下　悦二　日本東アジア学会会長　他 11 名
韓国側：金　日坤　韓国東アジア学会会長　他 20 名

◆　第 26 回定例研究会
日時：1998 年 6 月 27 日（土）13：30～17：00
場所：（財）国際東アジア研究センター　会議室
テーマ：「中国東北地区の国有企業改革の行方」
基調報告　金　鳳徳（東北財経大学経済研究所長・教授）
劉　昌黎（東北財経大学経済研究副所長・教授）
討論　　座長　　小川　雄平（西南学院大学商学部長・教授）
予定討論　木幡　伸二（福岡大学商学部助教授）
立石　揚志（西南学院大学商学部教授）

◆　東アジア学会第８回大会・日韓東アジア学会合同研究会
日時：1998 年 8 月 30 日（日）9：00～16：00
場所：安東文化会館（韓国慶尚北道安東市）
テーマ：「アジア的価値観とは何か」
午前の部
研究報告会　　座長　朴　仁鎬　（(財）釜山発展研究院研究委員）
報告１　韓国側大学院生：崔　善美（釜山大学大学院）
報告２　韓国側大学院生：金　良洙（全州大学大学院）
報告３　日本側大学院生：上山武志（全州大学大学院）
報告４　日本側大学院生：于　文生（西南学院大学大学院）
報告５　日本側大学院生：陸　文　（九州大学大学院）
午後の部
基調講演「儒教とアジア的価値観」
金　日坤（(財）釜山発展研究院長）
討論会「アジア的価値観とは何か？」
座長　李　海珠（福岡国際大学教授）・吾郷　健二（西南学院大学教授）
報告１．文学から見たアジア的価値観
岩佐　昌暲（九州大学大学院比較社会文化研究科教授）
報告２．国際交流とアジア的価値観
朴　明欽（(財）釜山発展研究院首席研究員）
報告３．アジア的経営とアジア的価値観
佐々木武夫（西南学院大学商学部教授）
報告４．アジア的価値観と現代社会の問題
金　洪石（(財）釜山発展研究院先任研究員）
報告５．儒教の功罪とアジア的価値観
奥山　忠政（紀全女子専門大学講師）
全体討論
話題提供「羅津・先鋒自由経済貿易地帯の近況報告」
小川　雄平（西南学院大学商学部長）

参加者：日本側　木下　悦二　日本東アジア学会会長　他約 20 名

◆　第 27 回研究会（定例研究会）
（東アジア学会・民族統一研究院合同研究会）
日時：1998 年 12 月 19 日（土）10：00～17：30
場所：（財）国際東アジア研究センター　会議室
テーマ：「金正日新体制下の政治・外交・経済政策」
開会の辞
挨拶　木下悦二（東アジア学会長・福岡国際大学長）
座長　林　一信（九州国際大学国際商学部教授）
午前の部
　研究報告１「最近の北朝鮮の主要な政治的変化」
　　Kim　Do－tae（統一政策室研究委員）
　研究報告２「北朝鮮の核開発疑惑と外交政策」
　　Hong　Kwan－hee（統一政策室研究委員）
　研究報告３「北朝鮮の改革・開放政策－南浦市の視察結果を事例として－」
　　森　善宣（富山国際大学助教授）
会員総会
午後の部
　研究報告４「北朝鮮の経済政策変化と南北経済協力」
　　Choi　Su－young（北韓経済社会室長）

　予定討論１　小川　雄平（西南学院大学商学部教授）
　予定討論２　Kim　Chang－keun（企画調整室責任研究員）
　予定討論３　筒井　博人（西日本新聞社編集局整理部次長）
全体討論
閉会の辞

【1999 年】

◆　第 28 回研究会（定例研究会）
日時：1999 年 4 月 24 日
場所：小倉ガーデンホテル柴川
報告：「日韓両民族は心底解りあえるのか？―21 世紀への期待と課題―」
　　町田　貢（韓国世宗大学教授・元駐韓国公使）

◆　日韓東アジア学会合同研究会
日時：1999 年 7 月 9 日
場所：住吉浜リゾートパーク
午前の部
自由論題研究報告
座長：櫻井　浩（久留米大学経済学部教授）・朴　明欽（釜山発展研究院研究企画室長）
報告 1.「中国国有大企業の再編戦略について」
　　喬　晋　建（熊本学園大学商学部助教授）
報告 2.「釜山の都市開発における倭館の意味」
　　金　興　官（東義大学都市工学科教授）

報告 3.「エネルギーと主食の時給」
工藤　憲男（西日本経済研究所長）
報告 4.「東アジアにおける国際労働力の移動」
権　奇　哲（釜山外国語大学経済学科教授）
午後の部
共通論題討論「自由貿易地域構想と日韓の政治・経済・文化・社会」
座長：林　一信（九州国際大学国際商学部長）・金　日坤（前釜山発展研究院院長）
問題提起１.「釜山港における自由地帯の設定に関する研究」
朴　彰　鎬（釜山発展研究院研究委員）
問題提起２.「日韓自由貿易協定－FAZ の教訓を踏まえて」
尹　明　憲（北九州大学産業社会研究所）
問題提起３.「日本における水産物輸入制度の問題点」
朴　明　燮（釜慶大学校国際通商学部教授）
予定討論１．奥山　忠政（紀全女子大学講師）
予定討論２．琴　　性根（釜山発展研究院研究委員）
予定討論３．小川　雄平（西南学院大学大学院経営研究科長・教授）

◆　第 29 回研究会（定例研究会）
日時：1999 年 9 月 22 日
場所：財団法人九州経済調査会（福岡市）
朝鮮問題フォーラム「朝鮮・９９年夏」
１．ビデオ上映と解説
広田　誠一（訪朝団事務局長・福岡県議会委員）
２．報告「福岡県議会第３次訪朝の意義と成果」
北原　守（訪朝団団長・福岡県議会委員）
３．報告「朝鮮の食糧事情」
小川　雄平（訪朝団顧問・西南学院大学教授）
４．報告「記者の見た平壌・南浦・開城・板門店」
秋山　惣一郎（朝日新聞社西部本社記者）
上西川原　敦（共同通信社福岡支社記者）
熊田　佳代子（NHK 福岡放送局記者）
筒井　博人　（西日本新聞社整理部次長）
中山　真一　（RKB 毎日放送記者）
祝部　幹雄　（毎日新聞社福岡総局記者）

◆　韓・日東アジア学会合同研究大会　浦項市制 50 周年記念国際シンポジウム
日時：1999 年 11 月 21 日
場所：浦項 1 大学セミナー室
第一部　パネルディスカッション「韓日海峡交流圏の再検討」
座長：朴　明欽（㈶釜山発展研究院先任研究委員）・小川　雄平（西南学院大学商学部教授）
・経済交流の側面から
研究報告：李　仁根（浦項 1 大学教授）
予定討論：尹　明憲（北九州大学助教授）
・学術文化交流の側面から
研究報告：盧　成煥（蔚山大学教授）
予定討論：安達　義弘（福岡国際大学教授）
・危機管理の側面から

研究報告：奥山　忠政（紀全女子専門大学講師）
予定討論：崔　哲雄（㈶釜山発展研究院専門委員）
・全体討論
第二部 シンポジウム「中国建国 50 年と東アジア」
基調報告：趙　鳳杉（筑紫女学園大学教授・元吉林大学博士指導教授）
パネラー：立石　揚志（西南学院大学教授）
金　昌洙（釜山大学教授）
趙　鳳杉（筑紫女学園大学教授・元吉林大学博士指導教授）
コーディネーター：金　日　坤（釜山大学名誉教授）

【2000 年】

◆　東アジア学会・朝鮮問題研究会合同研究大会
日時：2000 年 1 月 22 日
場所：西南学院大学□号館 7F 中会議室
「朝鮮問題国際フォーラム」
午前の部
座長：櫻井　浩（久留米大学教授）
基調報告「朝鮮半島の危機サイクル」
河　英善（ソウル大学校教授）
報告□　「朝鮮の食糧事情」
小川　雄平（西南学院大学教授）
報告□　「21 世紀の朝鮮半島統一」
金　暎浩（誠信女子大学校助教授）
午後の部
座長：林　一信（九州国際大学教授）
報告□　「米・朝関係」
申　旭熙（ソウル大学校助教授）
報告□　「中・朝関係」
安　仁海（高麗大学校助教授）
報告□　「日・朝関係」
孫　洌（ソウル大学校講師）
予定討論□　出水　薫（九州大学助教授）
予定討論□　森　善宣（富山国際大学助教授）
予定討論□　櫻井　浩（久留米大学教授）
予定討論□　趙　鳳彬（筑紫女学園大学教授）

◆　第 30 回研究会（定例研究会）
日時：2000 年 5 月 13 日
場所：西南学院大学
東アジア学会・「沙也可」交流会合同研究大会
開会の辞
東アジア学会会長　木下悦二（福岡国際大学学長）
「沙也可」交流会会長　北原　守（福岡県議会議員）
コーディネーター：奥山　忠政（「沙也可」交流会副代表）

報告：「『沙也可＝原田信種』説の提唱」
丸山　擁成（西南学院大学教授）
予定討論：筒井　博人（西日本新聞社整理部次長）

◆　東アジア学会第 10 回記念大会
日時:2000 年 9 月 9 日（土）、10 日（日）
会場：北九州大学新館
主催：東アジア学会
後援：北九州市、（財）アジア女性交流・研究フォーラム、
（財）北九州コンベンションビューロー、（財）北九州都市協会
第 1 日午後の部
シンポジウム『東アジアの広域連携は可能か？』
基調講演：韓国翰林大学校教授（韓日文化交流政策諮問委員長）池明　観
パネリスト：北九州市都市協会会長（元北九州市助役）出口　隆
（株）正興電機製作所会長（福岡大連未来委員会会長）大島　淳司
韓国翰林大学校教授（韓日文化交流政策諮問委員長）池明　観
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：毎日新聞西部本社編集局長（東アジア学会副会長）永守　良孝
第 2 日午前の部
シンポジウム『留学生の見た日本文化・社会』
パネリスト　　ミャンマー：北九州大学文学部 3 年　カイヌ・ワコー
ネパール：福岡大学大学院経済学研究科　サガール・シャルマ
韓国：九州大学大学院比較社会文化学府　鄭　敬蛾
中国：西南学院大学大学院経営学研究科　于　文生
中国：久留米大学大学院比較文化研究科　黎　克林
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　北九州大学外国語学部講師　金　貞淑
第 2 日午後の部
第 1 分科会『新しい世紀の新しい家族像を考える―儒教を足がかりとして―』
パネリスト　韓国：同徳女子大学校教授　盧　英姫
中国：岩手県立大学社会福祉学部教授　李　秀英
日本：熊本学園大学社会福祉学部教授　篠崎　正美
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ（財）アジア女性交流･研究フォーラム専務理事　三隅　佳子
第２分科会『歴史の中の環東シナ海国際交流』
福岡国際大学国際コミュニケーション学部教授　安達　義弘
九州大学大学院人文科学研究院助教授　六反田　豊
神戸女学院大学文学部教授　真栄平房昭
九州大学大学院人文科学研究院助教授　佐伯　弘次
第３分科会『朝鮮半島情勢の変化と今後』
佐賀大学文化教育学部助教授　森　善宣
久留米大学経済学部教授　櫻井　浩
西日本新聞社地域報道センター部長　村田　勝重
九州国際大学国際商学部長　林　一信
福岡県議会議員　北原　守

【2001 年】

◆　日韓東アジア学会合同研究会　「東アジアの観光」

日時：2001 年 2 月 18 日(日)午前 9 時 30 分～午後 5 時
会場：佐賀県嬉野温泉「和多屋別荘」会議室
共催：日本東アジア学会･韓国東アジア学会
協賛：嬉野温泉「和多屋別荘」･(財)釜山発展研究院･(財)国際東アジア研究センター
挨拶：日本東アジア学会会長　木下　悦二（福岡国際大学学長）
　　韓国東アジア学会会長　林　正徳（釜山発展研究院院長）
午前の部　共通論題研究報告・討論
座長：金　日坤（宮崎産業経営大学教授）・趙　鳳彬（筑紫女学園大学教授）
報告１．「産業連関分析から見た九州観光の課題―長崎県佐世保市を事例として」
　　河村　玉（中国工運大学元講師）
報告２．「アジア・グリーンツーリズム・ネットワーク構想」
　　奥山　忠政（紀全女子大学講師）
特別報告「東アジアの国際観光」
　　石井　幸孝（九州旅客鉄道（株）代表取締役会長）
討論
午後の部　自由論題研究報告
座長：楼井　浩（久留米大学教授）・朴　明欽（釜山発展研究院先任研究委員）
報告１．「韓国企業の物流情報システム活用に関する研究」
　　宋　啓義（東西大学校教授）
報告２．「北東アジアの中枢都市」
　　工藤　憲男（西日本経済研究所所長）
報告３．「韓日自由貿易地帯の経済的波及効果分析」
　　高　鐘煥（釜慶大学校教授）
座長：櫻井　浩（久留米大学教授）・李　海珠（福岡国際大学教授）
報告４．「環黄海圏の自由貿易地域の協力体系構築」
　　朴　彰鎬（仁川発展研究院研究委員）
報告５．「Changing International Politics and Economic Cooperation/
　　Competition in East Asia」
　　金　俊佑（釜山発展研究院副研究委員）
報告６．「アジアの通貨危機と現代の資本主義」
　　金　日坤（宮崎産業経営大学教授）
閉会の辞

◆　第 11 回大会
日時：2001 年 9 月 8 日（土）10:00～17:00
場所：西南学院大学□号館 8Ｆ大会議室
テーマ：「東アジア世界」の構図―歴史と国境を超えて―
午前の部
コーディネーター：安達　義弘（福岡国際大学教授）
共通論題研究報告
　報告１．「東アジアの基軸通貨」
　　工藤　憲男（西日本経済研究所長）
　報告２．「華人系資本のコーポレート・ガバナンス」
　　王　効平（北九州市立大学教授）
　報告３．「『環黄海経済圏』から『東アジア地中海経済圏』へ」
　　小川　雄平（西南学院大学教授）

午後の部
コーディネーター：安達　義弘（福岡国際大学教授）
共通論題研究報告
　報告４．「現代中国文学史をどう見るか」
　　岩佐　昌暲（九州大学大学院言語文化研究院長）
　報告５．「アイデンティティーとしての麺文化」
　　奥山　忠政（アジア麺文化研究会事務局長）
全体討論

◆　第 31 回定例研究会
日時：2001 年 11 月 17 日（土）14:00～16:30
場所：西南学院大学□号館 8F 大会議室
一般公開講演会
講演「中国・台湾の WTO 加盟と東アジア経済の一体化」
　　黄　枝 連　（香港浸会大学教授・アジア太平洋学会会長）
参加者：約 50 名

【2002 年】

◆　韓日東アジア学会合同研究会
韓国側主催
日時：2002 年 3 月 23 日（土）9:30～17:00
場所：釜山発展研究院会議場（大韓民国釜山広域市東区凡一洞）
テーマ：『地方から見た日韓交流史』
午前の部
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：朴 明欽（釜山発展研究院先任研究委員）・尹 明憲（北九州大学産業社会研究所教授）
報告１．「朝鮮後期の釜山倭館においての経済交流」
　　金　東哲（釜山大学校史学科教授）
報告２．「百済と九州」
　　奥山　忠政（紀前女子大学講師）
報告３．「朝鮮通信使と永嘉台」
　　金　英昊（釜山港湾研究会長）
報告４．「対馬宗家文書について」
　　鄭　成一（慶應義塾大学客員教授）
報告５．「雨森芳洲と交隣須知」
　　蔡　栄姫（釜慶大学校国文科教授）
午後の部
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：朴　仁鎬（釜山経済を生かす市民連帯議長）・奥山　忠政（紀全女子大学講師）
報告６．「東アジアの基軸通貨」
　　工藤　憲男（西日本経済研究所長）
報告７．「釜山の世界都市への条件」
　　朴　仁鎬（釜山経済を生かす市民連帯議長）
報告８．「一杯のお茶から日韓の生活文化交流の将来を考える」
　　糸乗　貞喜（(株）よかネット）
参加者：日本側　徳島　千穎　日本東アジア学会会長　他10名
　　韓国側　金　學魯　韓国東アジア学会会長　他15名

◆　第 32 回定例研究会
日時：2002 年 5 月 18 日（土）午後 2 時～午後 4 時 30 分
場所：西南学院大学　2 号館 8 階　大会議室
内容：米朝関係をテーマに講演、引き続き趙鳳彬・筑紫女学園大教授をコーディネーターに討論
講師：ヤン・C・キム（ジョージワシントン大学教授）（日本語による講演）
参加者：43 名（一般市民にも公開）

◆　第 33 回定例研究会
日時：2002 年 7 月 27 日（土）午後２時～午後５時
場所：西南学院大学　学術研究所１階　大会議室
講演：「日・中・韓に共通する課題－エネルギー・環境・食料問題－」
講師：金　鳳徳（東北財経大学教授・広島修道大学客員教授）
参加者：12 名（一般非公開）

◆　第 12 回大会
日時：2002 年 11 月 23 日（土）午後 2 時～午後 5 時、24 日（日）午前 10 時～午後 5 時
場所：国際東アジア研究センター会議室
パネルディスカッション「朝鮮の「改革・開放」は本物か？」
　パネリスト：金　珍基（釜慶大学校教授）
　　李　相萬（中央大学校教授・民族統一研究所所長）
　　姜　日天（朝鮮大学校講師・在日本朝鮮社会科学者協会常任理事）
　　李　南柱（朝鮮問題研究所所長）
　ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　：趙　鳳彬（筑紫女学園大学教授）
　　櫻井　浩（久留米大学教授）
若手研究者研究報告会
　報告者：筧　雅貴（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程１年）
　　哈日巴拉（　　〃　　２年）
　　森實　麻子（　　〃　　１年）
　ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　：　菅　　英輝（九州大学大学院比較文化社会研究院教授）
参加者：日本側　　徳島　千穎　日本東アジア学会会長　他28名
　　韓国側　　朴　　仁鎬　釜山経済を生かす市民連帯　議長　他７名

【2003 年】

◆　第 34 回定例研究会
日時：2003 年 5 月 10 日（土）午後 2 時 30 分～午後 4 時 30 分□会員総会と同日開催
場所：西南学院大学　□号館 7 階　中会議室
講演：「米国の朝鮮半島政策」
講師：菅　英輝（九州大学大学院比較文化社会研究院教授）

□　第 35 回定例研究会
日時：2003 年 6 月 28 日（土）午後 2 時～午後 4 時 30 分
場所：西南学院大学　□号館 7 階　中会議室
講演：「米・朝関係と日・中・韓」
講師：ヤン・C・キム（ジョージワシントン大学名誉教授）

ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：小川　雄平（西南学院大学商学部教授）

□　第 1 回「ビジョンと連帯 21」との交流・討論会
日時：2003 年 7 月 26 日（土）午後 2 時～ 5 自 45 分
場所：西南学院大学　学術研究所 1 階　大会議室
歓迎挨拶：北原　守（東アジア学会理事・福岡県議会議員）
交流・討論会
座長：櫻井　浩（久留米大学経済学部教授）・金　英哲（グローカル・ネット代表）
基調報告：「日韓相互理解の深化のために」
１．金　泰萬（韓国海洋大学東アジア学科教授）
２．小川　雄平（西南学院大学商学部教授）
討論□：「北朝鮮をどう見るか」
問題提起：李　南柱（朝鮮問題研究所所長）
討論□：「歴史認識の共通化は可能か」
問題提起：奥山　忠政（「沙也可」交流会副代表）
全体討論

◆　第 13 回大会
日時：2003 年 9 月 27 日（土）午後 1 時～5 時
　　28 日（日）午前 10 時～午後 4 時 30 分
場所：西南学院大学　□号館　8 階大会議室／7 階中会議室
シンポジウム「朝鮮戦争の今日的意味を考えるー停戦 50 周年を迎えて」
　基調報告　：朴　明林（延世大学校国際学大学院教授）
　パネリスト：櫻井　浩（久留米大学経済学部客員教授）
　　森　善宣（佐賀大学文化教育学部助教授）
　　朴　明林（延世大学校国際学大学院教授）
　ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　：菅　英輝（九州大学大学院比較社会文化研究院教授）
自由論題研究報告会
　研究報告□「ハイアールのブランド戦略」
　　呉　暁東（西南学院大学大学院経営学研究科博士課程後期）
　　□「東アジア通貨圏の構想」
　　工藤　憲男（西日本経済研究所代表）
共通論題研究報告会「アジアのイスラム」
　研究報告□「近代日本とイスラムの出会い：日本と西アジアの初期の関係に関する研究」
　　マイケル・ペン（北九州市立大学法学部外国人教師）
　　□「インドネシアにおけるイスラムと大衆文化
　　ーダンドゥット歌手イヌルをめぐって起きたことー」
　　佐々木拓雄（九州大学大学院比較社会文化研究科博士課程）
　　□「日本のイスラムとアジアのイスラム（日本における対イスラム政策の課題）」
　　古賀　幸久（久留米大学法学部助教授）

◆　書籍の編集・出版事業
書名：『日韓の架け橋となった人びと』（ISBN4-7503-1796-9）
編者：東アジア学会
内容：歴史教科書の副読本として編集・出版
　　序文：編集委員会（代表：小川雄平（西南学院大学商学部教授））
　　第1章　　李参平：兪　華濬（玄海人クラブ代表）

第2章　雨森芳洲：嶋村初吉（西日本新聞社編集企画委員会編集委員）
第3章　安重根：黒木彬文（福岡国際大学国際コミュニケーション学部教授）
第4章　楊宗悦：安達義弘（福岡国際大学国際コミュニケーション学部教授）
第5章　尹東柱：奥山忠政（「沙也可」交流会副代表）
第6章　田内千鶴子：奥山忠政（「沙也可」交流会副代表）
出版社：明石書店
出版日：2003 年 10 月 20 日
頁数：１８０頁
定価：1600 円

【2004 年】

□　第 36 回定例研究会
日時：2004 年 4 月 24 日（土）14 時～17 時 30 分
場所：西南学院大学　学術研究所 1 階　第２会議室
内容：著書を出版した会員による報告と質疑
報告１.「『文革期の文学』とはどういうものか？」
　　報告者：岩佐　昌暲（九州大学大学院言語文化研究院教授）
報告２.「文化麺類学ことはじめ」
　　報告者：奥山　忠政（麺文化研究会事務局長）
報告３.「東アジア地中海経済圏」
　　報告者：小川　雄平（西南学院大学商学部教授）

◆　第 37 回定例研究会
日時：2004 年 6 月 12 日（土）13 時 30 分～17 時 45 分
場所：西日本新聞社会議室
シンポジウム「中国と朝鮮半島情勢」
基調報告「中国から見た朝鮮半島情勢」
　　朱　建栄（東洋学園大学教授）
討論□「北朝鮮の経済改革について」
　パネリスト　文　浩一（朝鮮問題研究所）
　　朴　貞東（仁川大学校）
　ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　中川　茂（西日本新聞社）
討論□「６者協議の行方」
　パネリスト　李　鍾元（立教大学）
　　朴　栄濬（韓国国防大学校）
　ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　菅　英輝（九州大学大学院）

◆　第２回「ビジョンと連帯 21」との交流会
日時：2004 年 7 月 15 日（木）
場所：韓国釜山広域市
釜山の知識人研究交流組織「ビジョンと連帯２１」との共催シンポジウム

◆　第 14 回大会
日時：2004 年 9 月 25 日 13 時 30 分～17 時・26 日 10 時～17 時
場所：西南学院大学学術研究所 1 F 大会議室

第１日午後の部
シンポジウム「感性のグローバリズムー東アジアの感性を考える
パネリスト
　龍　　秀美「現代詩の現場からー日・台・韓の現代詩と東アジアの感性」（詩人）
　佐島　顕子「韓国漫画と音楽の感性」（福岡女学院大学人文学部助教授）
　中尾　智路「東南アジア若手アーティストの感性世界」（福岡アジア美術館学芸員）
　柴田　　篤「東アジアとキリスト教ー感性の交わるところ」（九州大大学院教授）
　間　ふさ子「侯孝賢・小津安二郎・ホジノ」（九州大比較文化社会学府博士課程）
コーディネーター
　岩佐　昌暲（九州大学大学院言語文化研究院教授）
第２日午前：若手研究者研究報告会
　第１報告「中国の FTA 戦略」李　洪光（西南学院大学大学院博士後期課程）
　第２報告「中国延辺地区の朝鮮語ー越境する民族と言語」宮下尚子（九大 COE 研究員）
第２日午後：日韓東アジア学会合同研究会

◆　日韓東アジア学会合同研究会
前年度は韓国側事情で未開催、年１回交互に開催の原則の下、日本側で開催
第 14 回大会第 2 日目午後の部として開催
日時：2004 年 9 月 25 日 13 時 30 分～17 時・26 日 10 時～17 時
場所：西南学院大学学術研究所 1 F 大会議室
第１報告「グローバリゼーションと同盟ーアメリカの同盟政策に変化はあるのか」
　　菅　　英輝（九州大学大学院比較社会文化研究院教授）
第２報告「韓日国際メガロポリス形成展望と効果」
　　朴　　仁鎬（韓国東アジア学会長）
第３報告「アジアのラテンアメリカ化」
　　吾郷　健二（西南学院大学経済学部教授）
第４報告「韓国の地方分権モデルー日・韓比較を中心に」
　　朴　　明欽（釜山市議会政策研究室長）
第５報告「徐福は神武天皇か？」
　　工藤　憲男（西日本経済研究所長）

【2005 年】

◆　第 38 回定例研究会
日時：2005 年 2 月 19 日（土）14 時～17 時
場所：西南学院大学学術研究所大会議室
「中国の東北振興と東アジアの地域協力」
報告□　金　鳳徳（中国東北財経大学国際経済貿易学院教授）
報告□　李　玉潭（中国吉林大学東北アジア研究院長・教授）

□　第 39 回定例研究会
日時：2005 年 5 月 14 日（土）14 時～17 時
場所：西南学院大学学術研究所 1 階大会議室
留学生・若手研究者による討論会「中国・韓国の反日運動」
　討論者：　李　　洪光（中国・西南学院大学大学院博士後期課程）
　　金　　丁（韓国・西南学院大学大学院博士後期課程）

戦　　麗華（中国・西南学院大学大学院博士前期課程）
田中　光晴（日本・九州大学大学院博士前期課程）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：王　忠毅（台湾・西南学院大学商学部教授）

◆　第 15 回記念大会
日時：2005 年 12 月 10 日 9 時 30 分～17 時 30 分・11 日 9 時 30～17 時
会場：10 日　北九州市国際会議場国際会議室・第 33 会議室
　　11 日　西南学院大学２号館 7F 小・中会議室
第１日目は「香港アジア太平洋学会」と、第２日目は「ビジョンと連帯 21」と共催
第１日午前：国際シンポジウム「東アジア地中海の時代を拓く」
基調報告　小川　雄平（日本西南学院大学教授）
　　李　　羅力（中国総合開発研究院副理事長）
　　古田　茂美（香港貿易発展局東京事務所首席代表）
　　金　　泰萬（韓国海洋大学校教授）
パネリスト　何　　亮亮（香港フェニックステレビ論説主幹）
　　宋　　鎮照（台湾成功大学政治経済系主任・教授）
　　林　　華生（早稲田大学中華経済研究所長）
　　王　　少普（上海社会科学院アジア太平洋研究所副所長・教授）
　　陳　　広漢（中山大学香港マカオジ珠江デルタ研究中心主任・教授）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　高木直人（九州経済調査協会調査研究部長）・郭益暁（香港珠海学院商学部長・教授）
第１日午後：パネルディスカッション
パネリスト　勝村　誠　（立命館大学助教授）
　　張　　琪　（瀋陽大学副教授）
　　宋　　成有（北京大学教授）
　　菅　　英輝（西南女学院大学教授）
　　河　　世鳳（釜山大学校教授）
　　朴　　載珍（東西大学校教授）
　　黄　　麗卿（北京大学大学院博士課程）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　安達　義弘（福岡国際大学教授）
第２日午前：部門別研究討論会
　第１部門：東アジア政治及び朝鮮半島統一問題
　第２部門：東アジアの文化・社会交流
　第３部門：東アジアの経済・環境問題
第２日午後：自由論題研究報告
　第１報告「中国東北振興の現状と課題」
　　李　洪光（西南学院大学大学院博士後期課程）
　第２報告「改革開放期中国の政治変動と指導者交代の分析」
　　茅野雅弘（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程）
　第３報告「ポスト開発体制と韓国の労働者」
　　佐々木武夫（西南学院大学教授）

【2006 年】

◆　第 40 回定例研究会
日時：2006 年 5 月 20 日（土）15 時 30 分～17 時
会場：西南学院大学学術研究所　第 4 会議室

報告：「法人化と大学改革―北九州市立大学の事例から考える―」
矢田　俊文（北九州市立大学学長）

◆　第 41 回定例研究会（共催：国際経済学会九州山口地区研究会）
日時：2006 年 7 月 29 日（土）13 時 30 分～17 時 30 分
会場：西南学院大学学術研究所　大会議室
報告１．「北朝鮮の中・韓との経済協力」
李　演華（西南学院大学大学院経営学研究科）
報告２．「東アジア NIEs のイノベーション・システム」
尹　明憲（北九州市立大学都市経済研究所）
他に国際経済学会九州山口地区研究会の会員による報告が行われた。

◆　第 16 回記念大会（共催：ビジョンと連帯 21）
開催日：2006 年 12 月 2 日（土）
会場：韓国海洋大学
第１セッション：福岡・釜山共同発展戦略・経済（FTA・地域金融・物流）
経済（FTA・地域金融）座長：洪　ジャンピョ（釜慶大学教授）
＜FTA 部門＞
韓国側：「韓日 FTA が釜山地域経済に及ぼす影響」
金　ゾングウック（釜山発展研究院釜山経済動向センター長）
日本側：「日韓 FTA が自動車部品産業に与える影響」
藤川　昇悟（阪南大学経済学部助教授）
＜地域金融部門＞
韓国側：「外国為替危機以後の韓国地域金融の変化と見込み」
朴　スニャン（釜山銀行調査研究部）
日本側：「北九州地域の中小企業金融の現状と企業の意識」
西田　顕生（西南学院大学商学部助教授）
討論者
韓国側：朴　チェジン（東西大学教授）、日本側：王　忠毅（西南学院大学商学部教授）
経済（物流）座長：南　ギチャン（韓国海洋大学教授）
韓国側：「釜山・福岡の港間競争と協力」
金　クァンフィ（東義大学教授）
日本側：「北東アジア国際物流の視点から見る釜山港と九州の補完関係」
汪　正仁（立命館アジア太平洋大学教授）
討論者
韓国側：梁　ウォン（釜山港湾工事副社長）、
日本側：小川　雄平（西南学院大学商学部教授）
第２セッション：九州・釜山の海洋環境保全と観光交流協力
＜環境部門＞　座長：具　滋相（釜山環境運動連合常勤代表）
韓国側：「北東アジア海洋環境保全のための協力・連帯方案」
朴　スックキョン（(社）環境科学自治研究所先任研究員）
日本側：「九州における環境産業の現状と今後の展望～北九州エコタウン事業を中心として～」
徳田　一憲（(財）九州経済調査協会研究主査）
討論者
韓国側：金　ジャグァン（釜山カトリック大学教授）
日本側：矢野　正孝（北九州工業高等専門学校教授）
＜観光部門＞　座長：黄　ヨンヒョン（東亜大学教授）

韓国側：「釜山・九州観光交流協力方案」
ユ　ヒョンスック（東義大学教授）
日本側：「福岡と釜山の観光交流ダイナミズムと観光協力」
千　相哲（九州産業大学経済学部助教授）
討論者
韓国側：李　ジュンホ（(株）旅行博士釜山支店長）
日本側：金　英哲（グローカル・ネット代表）
第３セッション：漢字文化・東アジア国際秩序
＜漢字文化部門＞　座長：金　泰萬（韓国海洋大学教授）
韓国側：「文の字源で見た文字中心主義の可能性」
河　ヨンサム（慶星大学教授）
日本側：「東アジアとヨーロッパとの出会い、そして漢字の運命」
安達　義弘（福岡国際大学教授）
討論者
韓国側：崔　ナンミン（韓国海洋大学外来教授）
日本側：海村　惟一（福岡国際大学助教授）
＜東アジア国際秩序部門＞　座長：崔　永浩（霊山大学教授）
韓国側：「日本のナショナリズムと独島歴史の歪曲」
崔　長根（大邱大学教授）
日本側：「紛争の東アジアの海を平和と共生の海へ」
申　明植（熊本学園大学教授）

【2007 年】

◆　第 42 回定例研究会
日時：2007 年 3 月 10 日（土）13 時 30 分～17 時 30 分
場所：西南学院大学学術研究所　大会議室
若手研究者による報告会
報告１．「南ベトナムにおける国内危機の高まりと米国の対応、1960 年 11 月～1961 年」
筧　雅貴（九州大学大学院比較社会文化学府）
報告２．「グローバル時代のリージョナル・ガバナンス―東アジアにおける新地域主義の展開―」
徐　涛（九州大学大学院比較社会文化学府）
報告３．「韓国の自由貿易協定戦略」
李　洪光（西南学院大学大学院経営学研究科）

◆　第 43 回定例研究会（特別講演会）
日時：2007 年 4 月 21 日（土）15 時～17 時 30 分
場所：西南学院大学　法科大学院 2 階大講義室
講演：「6 カ国協議の行方と朝鮮半島の統一」
講師：李　鍾奭（韓国世宗研究所首席研究委員）

◆　第 17 回記念大会（共催：中国東北財経大学）
テーマ：中国東北と日本九州
開催日：2007 年 9 月 15 日（土）～16 日（日）
会場：中国大連　東北財経大学
第１日：9 月 15 日（土）（09:00 ～ 18:20）

開会挨拶：徳島 千穎（東アジア学会会長・(株)ﾄｸｽｲｺｰﾎﾟﾚｰｼｮﾝ代表取締役会長兼社長）
歓迎挨拶：艾 洪徳（東北財経大学学長）
基調報告（09:15 ～ 10:15）
１.「東北振興戦略背景の再分析―中国経済の直面する新課題―」
金 鳳徳（東北財経大学国際経済貿易学院教授）
２.「中国東北と日本九州」
小川 雄平（西南学院大学商学部教授）
共通論題研究報告
（環境問題） 10:20-11:20
１.「日中環境協力における地方の役割と可能性―日本・九州からの提案―」
高木 直人（(財)九州経済調査協会調査研究部長）
２.「資源負荷と東北振興発展対策研究」
武 春友（大連理工大学生態計画発展研究所長・教授）
（直接投資） 11:20-12:50
３.「吉林省導入外資の評価と分析」
李 玉潭（吉林大学東北亜研究院長・教授）
４.「日本企業の対中投資資金調達戦略」
王 忠毅（西南学院大学商学部教授）
５.「日本企業の対中国東北地域投資分析」
笪 志剛（黒龍江省社会科学院東北亜研究所長助理・研究員）
（地域経済） 14:00-16:30
６.「新時期の遼寧省の戦略転換とその背景」
安 崗 （東北大学経済学部 講師）
７.「東北旧工業基地振興と大連の戦略」
趙 立成（中共大連市開放先導区工作委員会政治研究室主任・研究員）
８.「日本九州地域の地域金融の現状と課題」
西田 顕生（西南学院大学商学部准教授）
９.「東北振興と蒙古東部の発展」
包 思勤（内蒙古自治区発展研究中心処長・研究員）
10.「東北振興と通遼市の発展」
李 永剛（通遼市副市長）
（経済統合・経済協力） 16:50-18:20
11.「東アジア基軸通貨構想」
工藤 憲男（西日本経済研究所長）
12.「東北旧工業基地振興と日中経済協力の新課題」
宋 魁 （黒龍江省社会科学院東北亜研究所長・研究員）
13.「吉林省と日本の経済貿易関係」
龐 徳良（吉林大学東北亜研究院教授）
第 2 日： 9 月 16 日（日） 午前（09:30 ～ 11:30）
（東アジア文化） 09:30-10:30
14.「東アジアの近代化と文字政策」
安達 義弘（福岡国際大学国際コミュニケーション学部教授）
15.「東アジアにおける漢字統合について―近年中国漢字の統合趨勢を中心に－」
海村 惟一（福岡国際大学国際コミュニケーション学部准教授）
（日中若手研究者研究報告） 10:30-11:30
16.「国家政策に対する生活実践―延辺自治州一村の観光開発事業をめぐって－」
林 梅 （関西学院大学大学院社会学研究科院生）

◆　「ビジョンと連帯 21」との交流会
テーマ：東アジア共同繁栄の道
開催日：2007 年 12 月 1 日（土）
会場：西南学院大学西南コミュニティーセンター
開会挨拶：徳島　千穎（東アジア学会会長・㈱ﾄｸｽｲｺｰﾎﾟﾚｰｼｮﾝ代表取締役会長兼社長）
　　李　豪哲（ビジョンと連帯 21 会長）
分科会（14:20～18:20）
（政治部会）
座長：綛田芳憲（北九州市立大学准教授）・金チョンミン（ビジョンと連帯 21 理事長）
第１セッション（14:20～16:10）
報告１「東アジアの平和と“分断国家”韓国」
　　木村　貴（九州大学法学府博士後期課程）
報告２「日韓関係の構造転換と方向性」
　　ソン・ギソプ（釜山外国語大学外交学科教授）
第２セッション（16:30～18:20）
報告３「東アジアの平和と日本」
　　綛田　芳憲（北九州市立大学外国語学部准教授）
報告４「釜山と九州における NPO の連帯と交流の活性化方策」
　　キム・ヘモン（釜山参与自治市民連帯事務長）
（経済部会）
座長：城戸宏史（北九州市立大学大学院准教授）・ウォン・ヒヨン（釜山大学研究教授）
第１セッション（14:20～16:10）
報告１「自動車部品メーカーの随伴立地の日韓比較」
　　藤川昇悟（阪南大学経済学部准教授）
報告２「釜山主要輸出産業における産業内生産段階別の特化構造に関する分析」
　　パク・チェジン（東西大学国際関係学部教授）
第２セッション（16:30～18:20）
報告３「クラスター政策と地域イノベーションの課題」
　　城戸宏史（北九州市立大学大学院マネジメント研究科准教授）
報告４「日本の物流企業による釜山新港後背団地の戦略的活用の可能性」
　　キム・クァンヒ（東明大学流通経営学科専任講師）
（文化・観光部会）
座長：安達義弘（福岡国際大学教授）・金泰萬（韓国海洋大学東アジア学科教授）
第１セッション（14:20～16:10）
報告１「日韓海峡圏における観光交流のあゆみ」
　　田代雅彦（(財)九州経済調査協会調査研究部次長）
報告２「インターネットを活用した釜山□九州間における観光の活性化方策」
　　イ・ジュンホ（㈱旅行博士理事）
第２セッション（16:30～18:20）
報告３「漢字における反訓という現象について」
　　岩佐昌暲（熊本学園大学外国語学部教授）
報告４「漢字字源からみた古代中国人の視覚思惟」
　　ハ・ヨンサム（慶星大学中語中文学科教授）

◆　北九州市民講座の受託
北九州市の市民講座（アジア理解講座～『東アジア地中海』の時代を拓く～）を受託し、講座の企

画・運営を行った。

《アジア理解講座の概要》　　コーディネータ：小川　雄平

日程	テーマ	担当講師
6 月 27 日	プロローグ	小川　雄平
7 月 4 日	東アジア地中海地域の物流	小川　雄平
7 月 11 日	東アジア地中海地域の環境	矢野　正孝
7 月 18 日	東アジア地中海地域の政治（1）	綛田　芳憲
7 月 25 日	東アジア地中海地域の政治（2）	菅　英輝
8 月 1 日	東アジア地中海地域の文化	安達　義弘
8 月 8 日	東アジア地中海地域のビジネス（1）	城戸　宏史
8 月 22 日	東アジア地中海地域のビジネス（2）	徳島　千穎
8 月 29 日	東アジア地中海地域の観光	田代　雅彦
9 月 5 日	エピローグ：パネルディスカッション	

【2008 年】

◆　第 44 回定例研究会
日時：2008 年 4 月 26 日（土）
会場：西南学院大学　西南コミュニティーセンター
報告１．「東北アジア共同体の形成」
　　李　洪光（西南大学大学院経営学研究科博士後期課程）
報告２．開城工業団地投資研究訪問について
　　開城工業団地投資研究訪問団

◆　第 45 回定例研究会
日時：2008 年 6 月 15 日（日）
会場：西南学院大学　西南コミュニティーセンター
講演：「朝鮮半島における平和体制の構築」
講師：郭　台煥（米国イースタン・ケンタッキー大学名誉教授）

◆　第 46 回定例研究会
日時：2008 年 7 月 18 日（金）
会場：西南学院大学　西南コミュニティーセンター
講演：「韓国の中小企業ならびに中小企業金融の現状と課題」
講師：ホン・スニョン（韓国中小企業研究院副院長）

◆　第 47 回定例研究会
日時：2008 年 10 月 7 日（火）
会場：西南学院大学　西南コミュニティーセンター
講演：「北東アジアの輸送回廊について」
講師：栢原英郎（日本港湾協会会長）

◆　第 48 回定例研究会
日時：2008 年 10 月 24 日（金）
会場：西南学院大学　西南コミュニティーセンター
講演：「中国「改革開放」３０年と政治経済学論争―私の「学問之旅」を振り返って―」

講師：趙　鳳彬（元中国吉林大学経済管理学院博士指導教授・筑紫女学園大学教授）

◆　第 18 回記念大会（ビジョンと連帯 21 との合同シンポジウム）
日時：2008 年 12 月 6 日（土）
会場：韓国海洋大学　実習船ハンハダ丸
プログラム
□開会式□　(14：00～14：10)
開会辞　徳島　千穎（東アジア学会会長・ﾄｸｽｲｺｰﾎﾟﾚｰｼｮﾝ会長兼社長）
歓迎辞　李　豪哲（ビジョンと連帯 21 会長）
第 1 部　総合討論　(14：10～16：00)
基調講演「福岡－釜山間「超広域経済圏」形成の可能性」
　　琴　性根（釜山発展研究院）
約定討論「釜山、蔚山、慶尚南道の広域経済圏について」
　　朴　明欽（釜山市議会政策研究室長）
「福岡－釜山「広域連携」の可能性」
　　小川　雄平（西南学院大学商学部教授）
ラウンドスピーチ（参加者全員）
第 2 部　分科会（16：20～18：00）
第 1 分科会　経済・物流【司会：オ・ヨンシク（韓国海洋大学校）】
　報告 1「グローバル・ロジスティックス支援のため釜山新港背後物流団地の活用方案―九州経済圏の戦略的活用方案に基づいた研究」
　　グ・キョンモ（東義大学流通管理学科教授）
　討論 1　王　忠毅（西南学院大学商学部教授）
　報告 2「日本の離島航路について」
　　福田　晴仁（西南学院大学商学部准教授）
　討論 2　キム・グァンヒ（東明大学校流通経営学科教授）
第 2 分科会　政治【司会：シン・ジョンファ（東西大学校）】
　報告 1「李明博政府　対北政策の問題と課題」
　　羅　鍾萬（市民社会研究院）
　討論 1　綛田　芳憲（北九州市立大学外国語学部准教授）
　報告 2「日本における開発政治の終焉―熊本県・川辺川ダム開発の事例から」
　　土肥　勲嗣（九州大学大学院法学研究院助教）
　討論 2　ソン・ギョウック（釜山発展研究院）
第 3 分科会　社会・文化【司会：金　泰萬（韓国海洋大学校）】
　報告 1「持続可能な観光を考える―釜山「土曜常設伝統公演」の可能性を検討する」
　　洪　淳勉（釜山観光情報誌『まるごと釜山』発行人）
　討論 1　須藤　廣（北九州市立大学文学部教授）
　報告 2「明治末期の自家製焼酎廃止をめぐる論争」
　　安達　義弘（福岡国際大学コミュニケーション学部教授）
　討論 2　イ・スヨル（釜山大学校教授）

【2009 年】

◆　第 49 回定例研究会
日時：2009 年 3 月 7 日（土）
会場：西南学院大学　西南コミュニティーセンター

報告：「韓国「民主化」における政治弾圧被害者の尊厳回復の政治」
木村　貴（九州大学大学院法学府.博士後期課程）
講演：「当面する金融危機の特質－危機の展開とアジア」
講師：木下　悦二（当会名誉会長・九州大学名誉教授）

◆　第 50 回定例研究会
日時：2009 年 4 月 11 日（土）15 時 30 分～17 時 50 分
会場：西南学院大学　西南コミュニティーセンター　多目的室
報告１.「世界同時不況と地域企業」
片山　礼二郎（財団法人九州経済調査協会　情報研究部　次長）
報告２.「世界的な不況下における九州の自動車産業の現状と課題」
藤川　昇悟氏（阪南大学　経済学部　准教授）

◆　第 19 回記念大会（ビジョンと連帯 21 との合同シンポジウム）
日時：2009 年 10 月 31 日（土）14 時～18 時 15 分
会場：西南学院大学　西南コミュニティーセンター
開会挨拶：徳島千穎（東アジア学会会長・㈱ﾄｸｽｲｺｰﾎﾟﾚｰｼｮﾝ代表取締役会長兼社長）
金　鍾敏（ビジョンと連帯 21 理事長）
□政治部会□
座長：森　善宣（佐賀大学教育文化学部准教授）・李　貞浩（釜慶大学政治外交学科教授）
報告１「『司法正義の回復』と韓国『民主化』」
木村　貴（九州大学法学府博士後期課程）
報告２「韓中関係の課題と展望」
羅　鍾萬（市民社会研究院院長）
報告３「北朝鮮の金ジョンウン：金正日の後継者になれるのか？」
森　善宣（佐賀大学教育文化学部准教授）
報告４「北朝鮮の権力承継過程と今後の南北関係及び対外関係の見込み」
秦　煕官（仁済大学統一学部教授）
討論者（報告１～４）
綛田　芳憲（北九州市立大学外国語学部准教授）
金　英哲（NPO 法人次世代支援 GLOCAL NET 理事長）
鄭　允在（前　大統領儀典秘書官）
□経済部会□
座長：尹　明憲（北九州市立大学外国語学部教授）・宋　成俊（SBS 釜山支局次長）
報告１「超広域交流圏の計画と地域革新の構造―その論点と課題」
車　相龍（長崎県立大学経済学部准教授）
報告２「韓国コミュニティーガバナンスの特性と課題―地域社会福祉協議体を中心に」
楚　義秀（新羅大学社会福祉学科教授）
報告３「日韓海峡経済圏から超広域経済圏へ」
高木直人（(財)九州経済調査協会常務理事）
報告４「韓日クルーズ産業発展のための共同協力方案「釜山・福岡を中心に」」
成　恩希（東西大学観光学科教授）
討論者（報告１～４）
木幡伸二（福岡大学商学部教授）
佐々木武夫（西南学院大学商学部教授）
尹　景泰（釜山 YMCA 常任理事）
李　俊昊（J-Travel 理事）

□文化部会□
座長：新谷秀明（西南学院大学国際文化学部教授）・金　泰萬（韓国海洋大学東アジア学科教授）
報告１「「国語」教科書の中の「台湾国語」―台湾における「国語」規範の歴史」
有働彰子（西南学院大学国際文化学部非常勤講師）
報告２「実質的で効率的な文化交流のための提案」
柳　成孝（文化活動家）
報告３「東アジア文化圏における言語と文学」
新谷秀明（西南学院大学国際文化学部教授）
報告４「楽しい想像！文化流！」
朴　熙真（東洲大学写真映像学科教授）
討論者（報告１～4）
新谷秀明（西南学院大学国際文化学部教授）
有働彰子（西南学院大学国際文化学部非常勤講師）
金泰萬（韓国海洋大学東アジア学科教授）
呉星恵（東義大学美術学科非常勤講師）

【2010 年】

◆　第 51 回定例研究会
日時：2010 年 1 月 23 日（土）14 時 30 分～17 時 30 分
会場：西南学院大学　西南コミュニティーセンター2 階　会議室
報告１.「中国のエネルギー産業における市場経済化の進展：エネルギー・環境問題の解決に有効なのは政策か、市場か？」
堀井　伸浩（九州大学大学院経済学研究院准教授）
報告２.「中国東北振興戦略の新展開」
李　玉潭（吉林大学東北亜研究院教授）

◆　第 52 回定例研究会
日時：2010 年 2 月 27 日（土）14 時 30 分～17 時 30 分
会場：西南学院大学　西南コミュニティーセンター2 階　会議室
報告１.「中朝国境地域における経済協力の現状―丹東市を踏査」
李　演華（西南学院大学大学院経営学研究科）
報告２.「韓国の移住と多文化」
申　明直（熊本学園大学外国語学部教授）

◆　第 53 回定例研究会
日時：2010 年 5 月 8 日（土）14 時 30 分～17 時 45 分
会場：西南学院大学　西南コミュニティーセンター　多目的室
報告１.「東アジアにおけるクルーズ観光の動向―博多港寄港のクルーズ客船を中心として―」
上田　紘平（財団法人九州経済調査協会　調査研究部研究員）
報告２.「日韓併合 100 年　現場で見たもの」
小出　浩樹（西日本新聞国際部次長、前西日本新聞ソウル特派員）

東アジア研究(東アジア学会機関誌)　第12号

発行日：2010 年 10 月
発　行：東アジア学会
事務局：〒814-8511
福岡市早良区西新 6-2-92
西南学院大学　小川雄平研究室
Tel&Fax 092-823-4227
Mail：ogawa@seinan-gu.ac.jp

※本書の無断転載は難くお断りいたします。
予め学会事務局あて許諾を求めてください。